

# 大道上遺跡

平成7年度中部電力松島変電所拡張工事  
に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

1996年

中部電力株式会社  
長野県上伊那郡箕輪町教育委員会

# 大道上遺跡

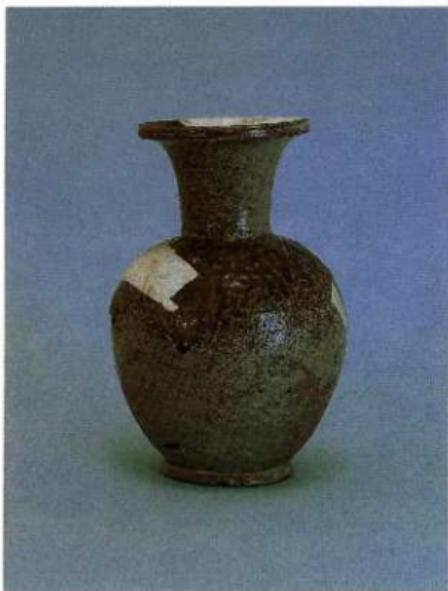
平成 7 年度中部電力松島変電所拡張工事  
に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

1996年

中部電力株式会社  
長野県上伊那郡箕輪町教育委員会



4号溝状遺構鳥瞰



4号溝状遺構出土灰釉長頸壺

## 序

箕輪町は、伊那谷の北部、歴史の古い落原の里にあり、天竜川と、南北に連なる東西の山々と、そこから流れ出す中小河川、そして河岸段丘に代表される複雑な地形とが織り成す、水と緑の風光明媚な自然あふれる郷土であります。先史の頃より、河川など水辺には、魚や獣などの食料を求めて人々が暮らし始め、それら先人達の努力によって築かれた我が郷土は、輝かしい文化と歴史を今に伝えています。中でも町の北西部を流れる深沢川の両岸には、古くは縄文時代からの遺跡が密集する所であり、大道上遺跡もその一つに数えられます。

昭和48年度、長野県教育委員会により、中央自動車道西宮線建設工事に先だつ緊急発掘調査を実施した堂地、中道の両遺跡が、本遺跡の北側に位置しています。その調査では、縄文時代・奈良・平安時代を中心に、住居址を始めとする遺構の数々が検出され、当時の生活を物語る土器や石器など貴重な遺物が豊富に出土しています。本遺跡は、これら遺跡に非常に関連性を持ち、深沢川右岸遺跡群の中でも重要な遺跡の一つと言えます。

今回は、中部電力株式会社の所有施設である、松島変電所の改修と増強工事に先だって、町教育委員会が貴社から委託を受けて実施した、緊急発掘調査の報告書であります。検出した遺構の中には、古代の国家事業として造作された官道「東山道」の一部ではないか、と各方面的著名な研究者の方々から、ご指摘とご講明を戴きました。しかし今回の調査の成果は、あくまでも「東山道」研究に一石を投じたことは確かでありますが、今後により幅広い調査と研究が必要であると思います。何れにせよ、学術的には貴重な資料を収めることができました。

また、多くの報道機関による公表もありまして、現地説明会では町内外から大勢の方々が訪れ、見聞を広げて戴けたことが、今回最も収穫のあった出来事だったと思います。内容につきましては、本書の中で詳細に記してあります。多くの皆様に広く活用され、郷土の歴史解明の一助となれば幸いと存じます。

最後になりましたが、本事業の遂行にあたり、深いご理解とご協力をいただきました、中部電力株式会社を始め、地元の松島区、そして調査関係者の皆様方に、本書の刊行をもちまして心から感謝申し上げます。

箕輪町教育委員会

教育長 堀 口 泉

## 例　　言

1. 本書は、長野県上伊那郡箕輪町中箕輪 11,045 番地 1 他に所在する大道上遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2. 本調査は、中部電力株式会社より委託を受けて、箕輪町教育委員会が行ったものである。

平成 7 年 4 月 1 日から 7 月 19 日まで現場作業を、7 月 20 日から 8 年 3 月 20 日まで整理作業及び調査報告書の作成作業を行った。

3. 本書を作成するにあたり、作業分担を以下のとおり行った。

遺物の洗浄・注記－穂谷 明子、大串 久子

遺物の接合・復元－福沢 幸一

造構図の整理・トレース－赤松 茂、池上 賢司、大串 久子、根橋とし子、穂谷 明子

遺物の実測・トレース－赤松 茂、大串 久子、根橋とし子

挿図作成－赤松 茂、根橋とし子、大串 久子

写真撮影・図版作成－赤松 茂、池上 賢司

4. 本書の執筆は、以下のとおり分担を行った。

第Ⅰ章－赤松 茂、大串 久子、根橋とし子

第Ⅱ章－柴 登巳夫、赤松 茂

第Ⅲ章－赤松 茂

第Ⅳ章－赤松 茂

第Ⅴ章－赤松 茂

5. 本書の編集は、赤松 茂、池上賢司、大串久子、柴登巳夫、根橋とし子、樋口彦雄、穂谷明子、福沢幸一が行った。

6. 出土遺物及び図版類は、すべて箕輪町教育委員会が保管している。広く活用されたい。

7. 本調査及び本書の作成にあたり、各機関並びに個人の方々にご指導ご協力をいただいた。記して感謝申し上げる。

機関－松島区、長野県文化財保護協会、(財)長野県埋蔵文化財センター、上伊那考古学会

個人－黒坂 周平、木下 良、郷道 哲章、高橋美久二、小平 和夫、福島 邦男

## 凡 例

1. 遺構実測図は、次の縮尺に統一した。

住居址・周溝状遺構 1:60、溝状遺構 1:100、溝状遺構土層断面 1:60、土坑 1:40、

遺物出土状況 1:20

2. 遺物実測図・拓影図は、次の縮尺に統一した。

土器実測図 - 1:4、石器実測図 2:3、1:3、土器拓影図 - 1:3、鉄器実測図 - 1:2

3. 土層及び土器の色調は、「新版 標準土色帖」を用いて記してある。

4. 土器の接合状況は、観察できるもののみ断面に表示してある。

5. 遺構実測図中におけるスクリーントーンの表示は、次のものを表す。

 = 石器断面      ● = 土 器

6. 土器実測図中におけるスクリーントーンの表示は、次のものを表す。

 = 須恵器       = 灰釉陶器       = 土師器内面黒色処理

7. 土坑一覧表の法量は、上から長径・短径・深さの順に記し、単位はmである。また、現存する数値は( )で、-は計測不能を表している。

8. 出土土器観察表の法量は、上から口径・底径・器高の順に記し、単位はcmである。また、現存する数値は( )で、-は計測不能を表している。

9. 出土石器観察表の法量は、上から長さ・幅・厚さの順に記し、単位はcmである。重きの単位は、gで表している。共に、現存する数値は( )で、-は計測不能を表している。

10. 出土鉄器観察表の法量は、上から長さ・幅・厚さの順に記し、単位はcmである。重きの単位は、gで表している。共に、現存する数値は( )で、-は計測不能を表している。

# 本文目次

題字	団長 橋口彦雄
巻頭カラー図版	
序	教育長 堀口　泉
例言	
凡例	
本文目次	
挿図目次	
図版目次	

第Ⅰ章 発掘調査の概要	1
第1節 調査の経過	2
第2節 調査の概要	2
第3節 調査日誌	3
第Ⅱ章 遺跡の環境	6
第1節 自然環境	6
第2節 歴史環境	7
第Ⅲ章 調査の結果	10
第1節 調査方法と結果概要	10
第2節 土層堆積状況	13
第Ⅳ章 造構と遺物	14
第1節 溝状造構	14
第2節 住居址	28
第3節 方形周溝状造構	30
第4節 土坑	32
第5節 造構外出土遺物	34
第Ⅴ章 まとめ	35

図版  
報告書抄録

## 挿 図 目 次

第1図 位 置 図.....	1
第2図 周辺遺跡分布図.....	9
第3図 調査区設定図 .....	10
第4図 全 体 図 .....	11・12
第5図 土 層 図 .....	13
第6図 4号溝状遺構出土状況実測図 .....	14
第7図 4号溝状遺構実測図 .....	15・16
第8図 4号溝状遺構出土土器実測図 .....	17
第9図 2・3号溝状遺構実測図 .....	19・20
第10図 2・3号溝状遺構出土土器実測図、拓影図 .....	21
第11図 1号溝状遺構実測図 .....	22
第12図 8号溝状遺構実測図 .....	23・24
第13図 7号溝状遺構実測図 .....	26
第14図 5・6号溝状遺構実測図・出土石器実測図 .....	27
第15図 1号住居址、出土土器実測図 .....	28
第16図 方形周溝状遺構実測図 .....	29
第17図 土坑実測図 1 .....	30
第18図 土坑実測図 2 .....	31
第19図 遺構外出土遺物実測図、拓影図 .....	33

## 表 目 次

第1表 周囲遺跡分布一覧表	8
第2表 4号溝状遺構出土土器觀察表	18
第3表 3号溝状遺構出土土器觀察表	21
第4表 5号溝状遺構出土石器觀察表	28
第5表 1号住居址出土土器觀察表	29
第6表 土坑一覧表	32
第7表 遺構外出土鐵器觀察表	34
第8表 遺構外出土石器觀察表	34

## 図 版 目 次

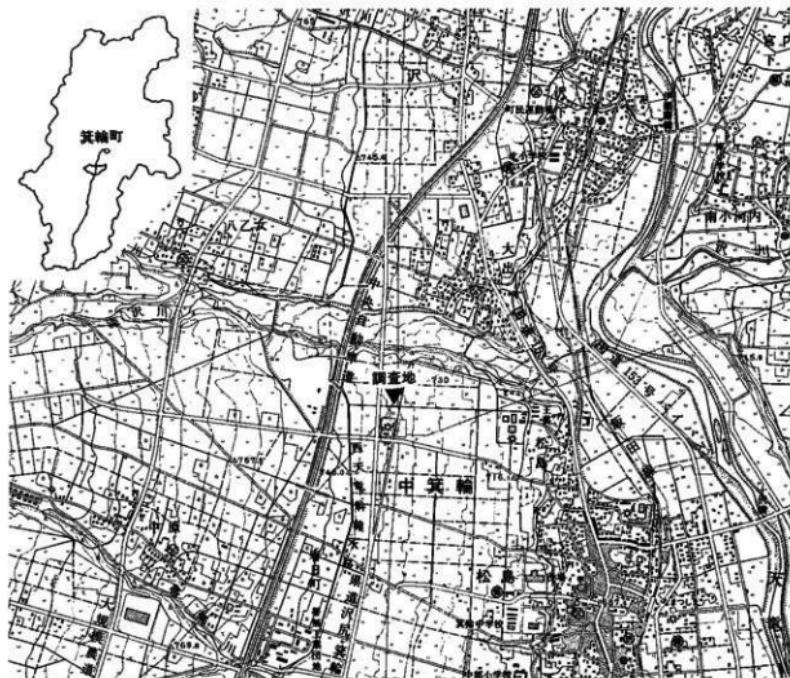
巻頭カラー図版 4号溝状遺構鳥観、4号溝状遺構出土灰釉長頸壺

図版1 調査地近景（調査前、西方より）、4号溝状遺構（鳥観）	
図版2 4号溝状遺構、1号溝状遺構	
図版3 4号溝状遺構土層断面1（A-A'）、同2（B-B'）、灰釉長頸壺出土状況	
図版4 2・3号溝状遺構（鳥観）、2・3号溝状遺構	
図版5 4・5・6号溝状遺構、7・8号溝状遺構（鳥観）	
図版6 7号溝状遺構、7号溝状遺構西土層断面1、同2	
図版7 1号住居址、方形周溝状遺構	
図版8 1号土坑、2号土坑、5号土坑	
図版9 6号土坑、7号土坑、8号土坑	
図版10 3・4号溝状遺構出土土器、1号住居址出土土器、遺構外出土土器	
図版11 出土石器、遺構外出土鉄器、調査参加者	

# 第Ⅰ章 発掘調査の概要

## 第1節 発掘調査の経過

大道上遺跡は、箕輪町松島地籍の北西部、天竜川に注ぐ中小河川によって形成された複合扇状地のほぼ中央部に位置し、深沢川右岸の微傾斜地に立地する。深沢川の両岸には、集落址を中心とした縄文、弥生、古墳、奈良、平安時代の複合遺跡地帯が広がる。折しも、中央自動車道が本流路を横断するにあたり、その建設工事に先だって、右岸では堂地遺跡、左岸は大出地区の中道遺跡の発掘調査が実施された。その結果、両遺跡とも縄文、奈良・平安時代の大集落遺跡である事が判明し、特に後者の時代では、伊那谷北部を代表する遺跡の一つとして広く知られるようになった。また、想定される本遺跡の範囲は、中部電力松島変電所をほぼ中心とするその周辺部が考えられる。しかし、昭和3年に「西天竜幹線水路」が完成したのを契機に、それ以東における大規模な開田工事が実施され、遺跡地を含む一帯が水田地帯と変貌を遂げてしまい、現況ではその詳細な範囲の確定は困難を極めると言える。



第1図 調査位置図 (1/25,000)

平成 5 年、中部電力株式会社より、将来的に安定した電力供給に対応するため、「東京電力」及び「関西電力」との中継地、かつ拠点的役割を果たす松島変電所の増強を図るため、既存施設の改修そして用地拡張を行う開発計画が町教育委員会に照会された。開発計画のある用地内における本遺跡の保護のため、同社用地課及び県教育委員会文化課との協議を重ねた結果、町教育委員会が同社の全面協力により、経費ほぼ全額負担による委託を受け、遺構・遺物の有無を確認するための試掘調査を平成 6 年度内に、その結果による記録保存を目的とした発掘調査を 7 年度内に実施する運びとなった。

## 第 2 節 発掘調査の概要

1. 遺 跡 名 大道上遺跡
2. 所 在 地 長野県伊那郡箕輪町大字中箕輪 11,045 番地 1 他
3. 調 査 位 置 東経 137°58'40"、北緯 35°55'10"、標高 733～738 m
4. 試掘調査期間 平成 6 年 12 月 5 日～同年 12 月 19 日
5. 整 理 期 間 平成 6 年 12 月 20 日～7 年 3 月 20 日
6. 発掘調査期間 平成 7 年 4 月 1 日～同年 7 月 19 日
7. 整 理 期 間 平成 7 年 7 月 20 日～8 年 3 月 20 日
8. 委託契約日 試掘調査－平成 6 年 11 月 20 日  
発掘調査－平成 7 年 3 月 30 日
9. 事 務 局 教育長 梶口 泉  
社会教育課長 大槻 丞司（平成 7 年 3 月離任）  
社会教育課長 北原 宣明（平成 7 年 4 月就任）  
副 参 事 柴 登巳夫（箕輪町郷土博物館館長）  
副 主 幹 青木 正（平成 7 年 3 月離任）  
副 主 幹 赤松 茂（同館学芸員）  
主 事 柴 秀毅（同館学芸員－平成 7 年 4 月着任）  
臨 時 職 員 酒井 蜂子  
臨 時 職 員 根橋とし子  
臨 時 職 員 宮脇 陽子（平成 7 年 3 月退職）  
臨 時 職 員 穂谷 明子（平成 7 年 6 月着任）
10. 調 査 団 調査団長 梶口 彦雄  
担 当 者 柴 登巳夫  
調査主任 赤松 茂  
調査員 福沢 幸一  
調査員 池上 賢司  
調査員 根橋とし子  
調査員 宮脇 陽子  
調査補助員 穂谷 明子

調査団員 泉沢徳三郎、井上 武雄、井上 隆次、浦野 美幸、  
漆山 美晴、遠藤 茂、大串 久子、大槻 茂範、  
大槻 泰人、加藤ユウ子、金沢 昭吾、倉田 千明、  
桑沢 順市、桑原 篤、小嶋 久雄、後藤 主計、  
小林 光治、小松 峰人、笹川 正秋、戸田 隆志、  
野村 金吉、藤沢 具明、伯耆原 正、堀 五百治、  
堀 美人、堀内 昭三、松田 貫一、水田 重雄、  
向山幸次郎、山口今朝人、山口 昭平、山田 武志

### 第3節 調査日誌

4月10日（月）晴

重機による表土除去作業を終日行う。

4月11日（火）晴後曇り

10時より中部電力関係者・町長・教育長の列席のもと、  
調査團の結団式と神事を執り行う。午後より遺構上面確認作  
業を開始。重機は終日稼動。みのわ・みのわ毎日・信濃毎日  
各新聞社・伊那ケーブルテレビが取材に訪れた。



4月12日（水）雨

室内作業

4月13日（木）晴

遺構上面確認作業。重機は終日稼動。産経新聞が取材に訪れた。

4月14日（金）曇り

遺構上面確認作業。重機は終日稼動。

4月17日（月）晴

遺構上面確認作業。重機は終日稼動。2・4号溝状遺構の合流付近より灰釉陶器片が出土する。

4月18日（火）晴

遺構上面確認作業。重機は終日稼動。1号溝状遺構の掘り下げと断面削り。

4月19日（水）雨

室内作業

4月20日（木）晴

遺構上面確認作業。重機は終日稼動。

4月21日（金）晴

遺構上面確認作業。重機は終日稼動。5・6号溝状遺構の掘り下げ。

4月24日（月）晴

遺構上面確認作業。5・6号溝状遺構を完掘し断面写真撮影。

4月25日（火）曇り後雨

遺構上面確認作業。10時頃雨が降り始め仕事を中止。黒坂修平氏他が視察に訪れた。

4月26日（水）晴

遺構上面確認作業。5・6号溝状遺構の写真撮影・平面測量。2～4号溝状遺構のプラン確認が終了し、掘り下げ開始。

4月27日（木）曇り

遺構上面確認作業、及び4号溝状遺構の掘り下げ。5・6号溝の土層断面測量。7号溝状遺構のプラン確認。



4月28日（金）曇り

7号溝状遺構のプラン確認。4号溝状遺構の掘り下げ。柴館長による学習会。

5月1日（月）～5月2日（火）雨

室内作業

5月8日（月）晴

終日4号溝状遺構の掘り下げ、及び土層断面測量。

5月9日（火）晴

4号溝状遺構の掘り下げと遺構上面確認作業。出土土器の写真撮影後、平面測量及び取り上げ。平安住居址の床面のみが確認された。

5月10日（水）晴

遺構上面確認作業、及び2・3号溝状遺構の掘り下げ開始。4号溝状遺構出土土器の平面・断面測量及び取り上げ。

5月11日（木）曇り

遺構上面確認作業。2・3号溝状遺構の掘り下げ。午後、研究者並びに各報道機関に対し説明会を実施。県文化財保護協会、県教育委員会文化課から関係者が訪れた。

5月12日（金）曇り後雨

遺構上面確認作業。2・3号溝状遺構の掘り下げ。午後、雨天のため作業中止。

5月15日（月）16日（火）雨

室内作業

5月17日（水）曇り後晴

遺構上面確認作業。7号溝状遺構の掘り下げ開始。

5月18日（木）晴

2・3・7号溝状遺構、土坑の掘り下げ。

5月19日（金）晴

方形周溝状遺構のプラン確認。2・3号溝状遺構の掘り下げ完了。各土坑の掘り下げ及び土層断面測量。町長以下、町の理事者、管理職員が視察に訪れた。



5月22日（月）雨

## 室内作業

5月 23日（火）晴

各土坑と周溝状遺構の掘り下げ。土層断面測量と写真撮影。

5月 25日（木）曇り

各土坑の測量及び写真撮影。各溝状遺構の白線引き。

5月 26日（金）晴

7号溝状遺構の測量及び写真撮影。各溝状遺構の消掃・白線引き。



5月 29日（月）雨

## 室内作業

5月 30日（火）晴

2・3号溝状遺構の土層断面測量・写真撮影・白線引き。

一部機材とテント撤収。全員での作業は本日で終了する。

5月 31日（水）晴

各土坑と周溝状遺構の写真撮影。1号住居址の土層断面測量及び注記・写真撮影。標高移動とBMの設定とグリット打ち。読売新聞が取材に来た。

6月 1日（木）晴

1号住居址の掘り下げと写真撮影、周溝状遺構の平面測量。グリット打ち。

6月 2日（金）曇り

7号溝状遺構・周溝状遺構の平面測量。グリット打ち。明日の現地説明会の準備。

6月 3日（土）曇りのち雨

午前、現地説明会準備。午後、一般者対象の現地説明会を開催。

6月 5日（月）曇り～7日（水）晴

各遺構の写真撮影、平・断面測量を行う。

6月 8日（木）曇り

全体写真撮影の準備。中電の鉄塔上25Mより全体写真撮影。

6月 9日（金）雨

## 室内作業

6月 12日（月）曇り～26日（月）曇り後雨

各遺構の写真撮影、平・断面測量を行う。



6月 27日（火）晴

見学者のために、一部遺構のシート・土壌を残し、機材を撤収。作業を終了する。各市町村教育委員会職員が見学に訪れた。

7月 19日（水）曇り後晴

シートの撤収。

## 第II章 遺跡の環境

### 第1節 自然環境

箕輪町は、西は木曾山脈、東は赤石山脈に囲まれた伊那盆地の北方にあり、諏訪湖を源とする天竜川が町のほぼ中央を東西に二分する形で南流している。天竜川西岸に発達した広大な扇状地は、木曾山系の山々から天竜川に流れ込む中小河川によって形成された複合扇状地である。北から、桑沢川、北の沢川、深沢川、帶無川、大泉川、小沢川と続き、南ほど流路が長くなっている。それは、西側の山々が北から南にかけて高さを増しているためで、その流路に比例して山麓に形成される扇状地の規模も大きくなっている。

この扇状地における地質構造は、ローム層とその下の砂岩・粘板岩を主とする円錐層・砂の層で構成されている。天竜川はその末端部を南流し、流路に沿って河岸段丘を造り上げている。段丘の突端部は、天竜川や中小河川の氾濫による水害を受けにくい東側に面する緩やかな傾斜地である。段丘下には、扇頂部や扇尖部より地下に浸透した地下水が伏流水となって天竜川層と沖積層の境に湧き出る湧水が多く、扇状地を流れる小河川の水利と合わせ、豊かな水源に恵まれている。また、段丘崖下には、天竜川による広大な冲積地帯が広がる。



上空より遺跡地を望む (1/8,000)

現在箕輪町における地勢は、東西に連なる山々が大部分を占めることから、総面積の約 64 % が林野で、約 28 % が農耕地、約 8 % が宅地等その他に利用されている。しかし、圃場整備等の大規模な土地改良事業により、近年農耕地を拡大する以前の扇状地上は、クリ、ナラ、クヌギなどの落葉広葉樹を中心とした自然の林野が広がっていたと言い伝えられている。また一帯は、カモシカ、ニホンジカ、イノシシ、キツネ、タヌキなどの中小の動物達の生息域でもあったと考えられる。

## 第 2 節 歴 史 環 境

箕輪町は、天竜川を挟んで典型的な河岸段丘と扇状地が形成された地形で、湧水にも恵まれ先史より人が居住し易い好的な所といえる。町内にはそんな原始・古代人たちが残した足跡ともいいくべき多くの遺跡が散在し、現在のところ包蔵地 176 箇所、古墳 24 基が確認され、上伊那郡内においても屈指の遺跡地帯として知られている。

その多くは河岸段丘上及び扇状地に立地しており、天竜川右岸の遺跡の分布状況は、河岸段丘の突端部にみられる遺跡と、深沢川や桑沢川などの天竜川に注ぐ小河川の両岸に所在する遺跡(1~7)、東西の山裾に広がる遺跡、の 3 類に分布域を大別することができる。本年までに行なわれた発掘例を中心に前者について概観してみると、縄文・弥生・奈良・平安の各時代の集落址、及び墓域を中心とした生活の痕跡、更に段丘崖下の箕輪遺跡に代表される生産遺跡も確認されている。

中でも、遺跡規模や出土遺物などで知られているものとして、上伊那郡唯一の前方後円墳の松島大墓古墳(10)は、両横のくびれ部に造り出しを有することから、「車塚型式」と呼ばれ、県内では他に類例を見ない古墳である。天竜川を隔てて東に面する扇状地上には、長岡古墳群が位置している。昭和 62 年度に発掘調査された源波古墳は、直径 20 m 程の円墳であるが、副葬されていた金属器類は、武具・馬具を始め、その内容には目を見張るものがある。また、昭和 27 年から開始された天竜川沖積での土地改良事業で発見された箕輪遺跡からは、古代稻作經營を解明するために貴重な木製遺物が大量に出土している。そして昭和 47 年に中央自動車道建設に伴う中道遺跡(2)、堂地遺跡(5)の発掘調査は、当時としては県下で最大規模のものであり、深沢川を挟み奈良から平安時代の大集落跡であることが明らかになった。中道遺跡からは、遺構・遺物とも他の同時期の遺跡より、特異な遺構・遺物の出土がみられ、多くの問題点を残している。

大道上遺跡は、「長野県史一考古資料編(遺跡地名表)・1981 年」では、須恵器・灰釉陶器が出土した平安時代の遺跡として登録されているが、西天竜幹線水路の開設による大規模な土地改良事業により、事業以前の地形状況が明確に観察できないものの、堂地遺跡を代表とする深沢川右岸に連なる遺跡群の中に含まれると言えよう。昭和 62 年には、県道建設に伴う堂地遺跡の発掘調査として、本遺跡と隣接もしくは遺跡地内と考えられる箇所が実施されており、奈良から平安時代の住居址を中心とする遺構が確認されている。西に隣接する狐窪地籍では前述した中央自動車道での調査を、更に平成 6 年度にはその西側の松島大原遺跡で、町土地開発公社による墓地公園建設による発掘調査を実施し、その結果からもほぼ同一時期に栄えた集落址を中心とする大遺跡群であると概観できよう。

また近世初頭期には、当時の飯田藩主小笠原秀政が行った様な土木工事の一つとして、伊那街道の補修工事と共に、文禄街道の西方に新路線の増設を図ったのが「春日街道」である。藩の老臣春日淡路

守が工事奉行を努めていたので、その新路線が「春日街道」と呼ばれ、現在も所々に道形とその名を残している。今日では、その道筋の大方が県道沢尻箕輪線として改修され、伊那谷北部の西側地域の主要道路として生まれ変わっており、地域の人々の間では本道を「春日街道」と呼称している。町内では、松島区春日町地籍から北方に深沢川に至るまでの約900mの区間に、本街道と称される道筋が生活道路として残っており、本遺跡の名もその路線を裏付ける「大道上」の小字名からの由来と考えられる。そして深沢川との接触するところには、川を横断する目的で工事を受けたものかは明確でないが、段丘の縁を「V」字に切り込んだ箇所が残存しており、道筋はそれにつながっている。

今後、これらの遺跡から出土した遺物及び各遺構の検討をしながらも、更にその周辺に見られる各遺跡との関連性を考えて行かなければならない。なお、これらの各遺跡は、「古代官道」の路線、及び「馬家」の位置などに関わる内容を含んでいる、との見方をする研究者も多い。今後の調査、研究を更に進めていくことも大切であるが、この一帯における開発事業には充分な注意を図り、これらの多くを保護、保存していく必要があるといえる。

第1表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	地籍	立地	時代					備考
				旧石	縄文	弥生	古墳	奈平	
1	大道上	松島	扇央		○			○	平成6年度試掘調査実施
2	中道	大出	扇央	○	○		○	○	昭和48年度県教委、63・平成5・6年度発掘調査実施
3	カンゼン	大出	扇央					○	
4	大出	大出	扇央	○				○	
5	堂地	松島	扇央		○	○		○	昭和48年度県教育委、62・平成5年度発掘調査実施
6	白杵洞	松島	段丘	○					
7	本城	松島	段丘	○	○	○	○	○	伝松島氏城跡含む 平成5・6年度発掘調査実施
8	中山	松島	段丘	○	○	○	○	○	昭和59・61・62年度発掘調査実施
9	大夫塚古墳	大出	扇央			○			
10	松島王墓古墳	松島	段丘			○			県史跡
11	大出城	大出	段丘					○	



第2図 周辺遺跡分布図 (1/10,000)

## 第III章 調査結果

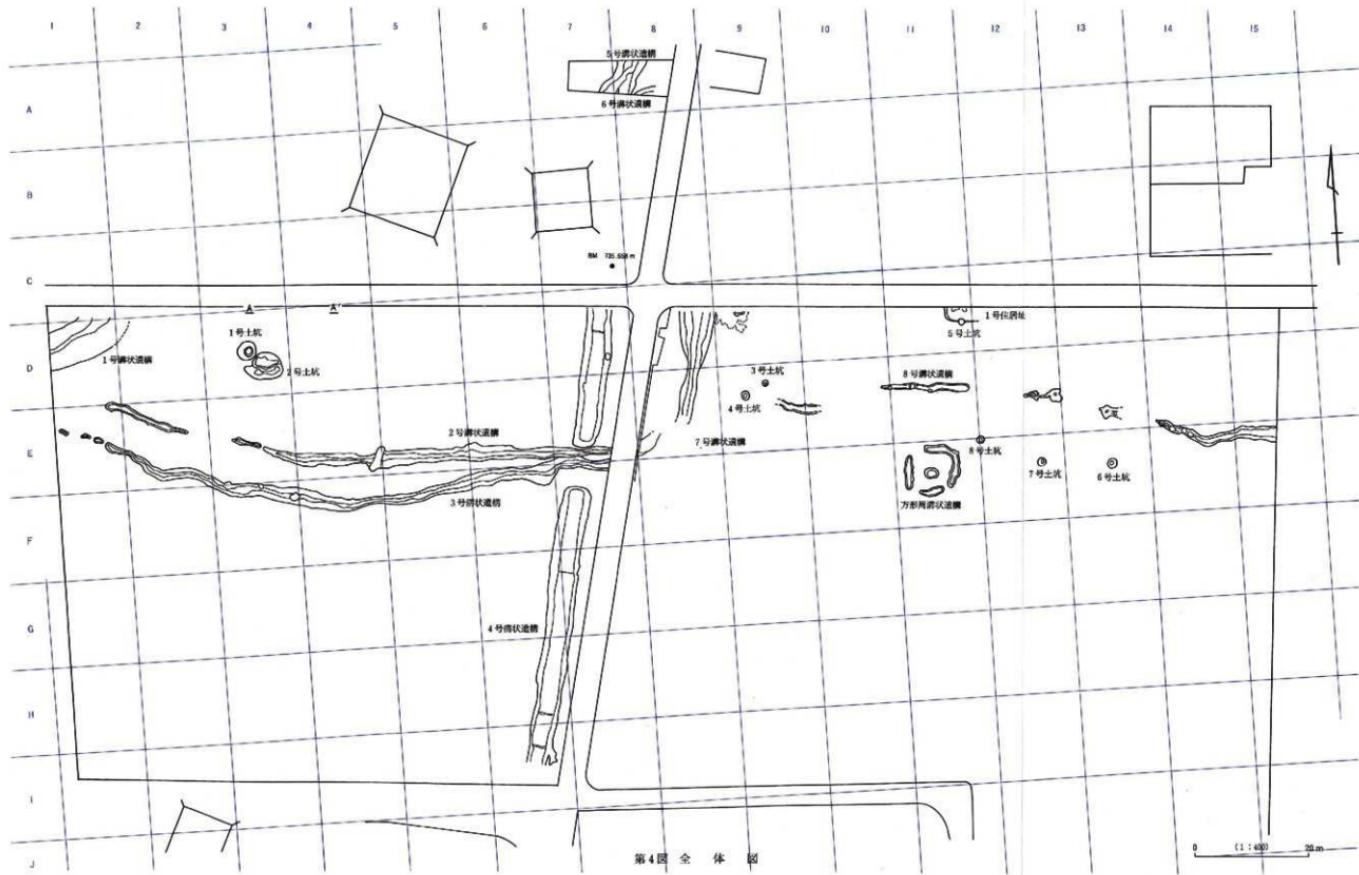
### 第1節 調査方法と結果概要

調査区は、その東側が昭和48年度に中央自動車道路建設に先立つ堂地遺跡の発掘調査が実施された箇所にあたり、工事対象面積4,000m<sup>2</sup>全面積が今回の調査対象であった。一带は、西天竜による土地改良が及ぼす、僅かな南北にうねりを残す、緩やかな自然傾斜地である。現在、胡桃・梅・雑穀・野菜の畑作地等が一帯の土地利用であるが、かつては松や雜木が生い茂る、地元ではこの一帯を「山」と呼ぶ森林地帯であった（第3図）。

調査は、まず調査地範囲の遺構の有無を確認すると同時に、本調査対象範囲を定めるため、試掘調査から取りかかった。調査区を南北方向におよそ10m間隔で、トレチの基準を4ヶ所程設定し、大型バックホーで部分的に土層の変化を確認しながら掘削を行った。その結果、調査区の南東部に向かって、緩やかな自然傾斜がみられるとともに堆積土も厚く、暗褐色土（IV層）確認面で遺構の検出が得られたのに対し、北西部においてはテフラ層（VII層）ないしテフラの漸移層（V層）まで削平され、その確認面で遺構が検出した。そして、地形の傾斜を考慮し、遺構確認面の直上までの表土を大型バックホーで削ぎ取り、その後は手作業による遺構上面確認作業、遺構内覆土の掘削及び断面測量、写真撮影・平面測量等の記録作業の手順で行った。遺構は、種別ごとに検出順で番号を付けた。グリッドは、5m四方



第3図 調査区設定図 (1:2,500)



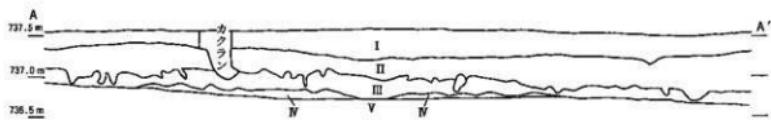
第4図 全 体 図

で主軸を南北方向に合わせ設定し、南北方向をアルファベットで、東西方向をローマ数字を用いて呼称した。記録作業における標高の割り出しは、調査区の南東部の道路脇にある水準点を基準にして、調査区北側にベンチマークを設定した(735.658 m)。

## 第2節 土層堆積状況

天竜川西岸の扇状地上における地質構造は、耕作土等黒褐色腐食土層→火山灰土層(テフラ層)→砂岩・粘板岩を主とする砂礫層という堆積状況が普遍的にみられる。造構の検出は、主に耕作土下の自然堆積黒褐色土、もしくはテフラの漸移層が一般的で、土地改良等による地形の削平により、テフラ確認面が造構検出面である場合も少なくない。また多くの造構は、テフラ層内にまで掘り込むものが多く、中には砂礫層にまで及ぶものも見られる。

- I層—にぶい黄褐色土(10 YR 4/3)。明黄褐色土(10 YR 6/6)をまばらに含む、耕作土等の表土。  
II層—明黄褐色土(10 YR 7/6)。土地改良工事によるものと思われる、人為的な搬入土。本調査区においては、南東部にのみ確認された。  
III層—黒褐色土(10 YR 3/2)。0.5~5 cmの礫をまばらに含む。  
IV層—暗褐色土(10 YR 3/3)。0.5~5 cmの礫をまばらに含む。黄褐色土(10 YR 5/6)を多量に含む。  
第五層の漸移層で、本層確認面が奈良・平安時代の造構確認面である。  
V層—明黄褐色土(10 YR 6/8)。一般的に本地域では、ローム層または赤土と呼ばれる火山灰土層(テフラ)。



第5図 土層図

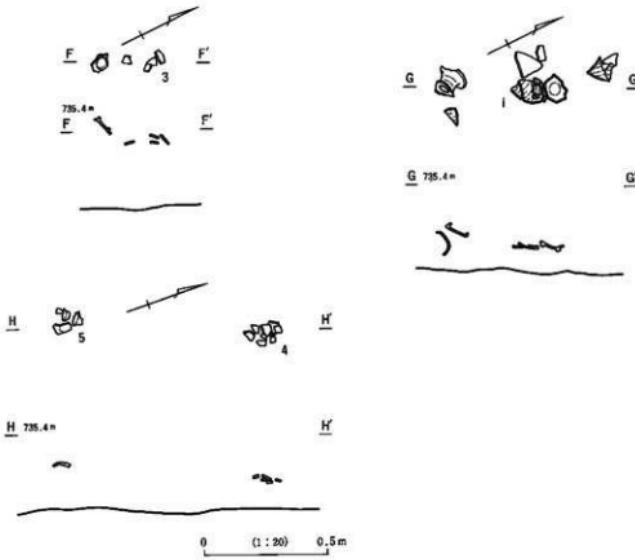
## 第IV章 遺構と遺物

### 第1節 溝状遺構

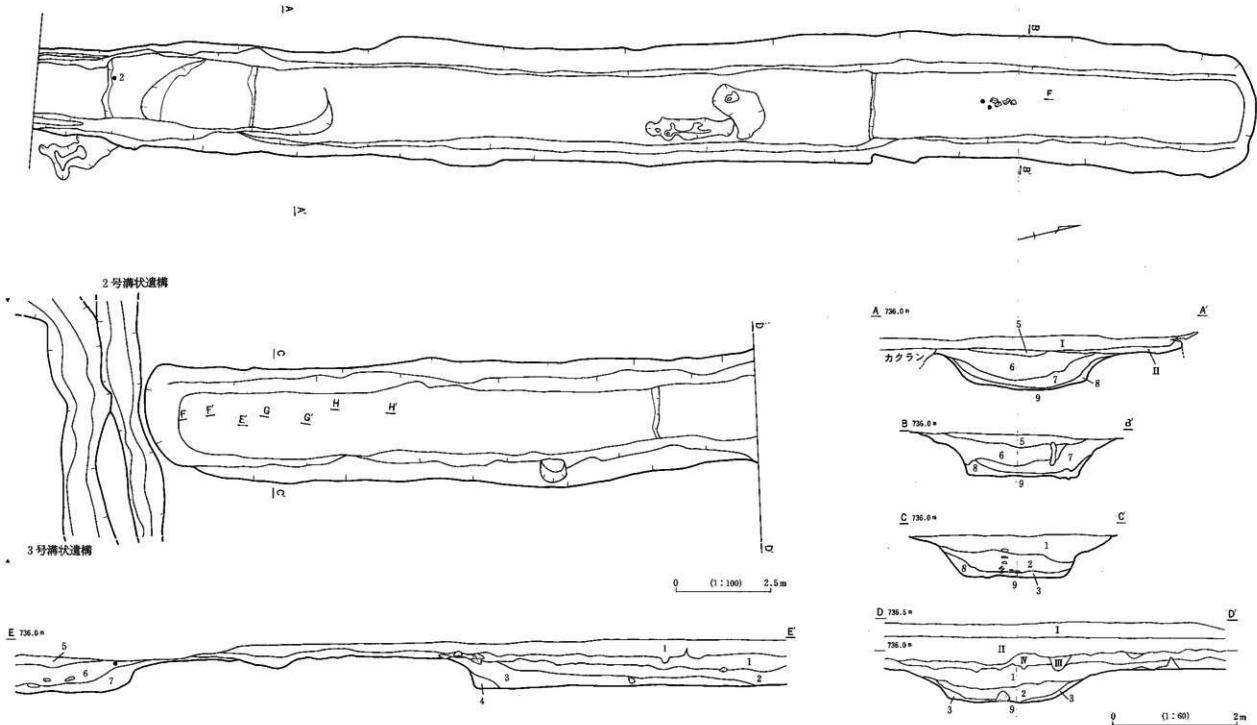
#### 1. 4号溝状遺構

遺構(第6、7図) 第1調査区の中央部、D-E-7、F-I-6・7グリッドの範囲に、町道の西側でほぼ道筋に並行する状況で検出した。規模は、全長51.9mの検出に留まり、N-14°-E方向に北方への緩傾斜にほぼ直線的に走る。確認幅は、断面測量地点A- $\bar{A}$ ライン2.78m、B- $\bar{B}$ ライン3.21m、C- $\bar{C}$ ライン2.95m、D- $\bar{D}$ ライン2.98mで、底面幅はそれぞれ1.9m、1.68m、1.79m、1.62mである。深さは、比較的削平状況の少ないB- $\bar{B}$ ラインで1.05mを測る。更に、第2調査区のA-5グリッドにも、本遺構の一部を確認している。

遺構の構造を観察すると、遺構を確認した縁から緩やかに傾斜し、深さの中央からややその下部より稜を持ち垂直気味に急傾斜で掘り込まれ、底面と接点はほぼ直角に明確な屈曲部を有する。底面はほぼ平坦を呈するが、堅固で住居址の床のように叩き締められたような状況はない。また、A- $\bar{A}$ ライン南0.7mと、B- $\bar{B}$ ライン南4.0m、D- $\bar{D}$ ライン南2.6mの各底面に10cm前後的小規模の段差が確認できた。特にB- $\bar{B}$ ライン南の箇所では、底面とつながる東側側面と縁部で同様の段差があり、直線状を



第6図 4号溝状遺構土器出土状況実測図



- 1層：10 YR 2/3 (黒褐色) 径0.5~5 cmの礫を5%含む。  
 2層：10 YR 2/1 (黒色) 径0.5~5 cmの礫を5%含む。土器を包含する。  
 3層：10 YR 4/1 (褐灰色) 径0.5~5 cmの礫を5%含む。  
 4層：10 YR 3/3 (暗褐色) ローム粒子を3%、径5 cmの礫を5%含む。  
 5層：10 YR 2/3 (黒褐色) 径0.5~3 cmの礫を3%含む。
- 6層：10 YR 2/1 (黒色) 径0.5~3 cmの礫を3%含む。  
 7層：10 YR 4/3 (にじい黄褐色) 細砂を30%含む。  
 8層：10 YR 4/4 (褐色) ローム粒子を20%、細砂を20%含む。  
 9層：10 YR 5/8 (黄褐色) ローム層である。

第7図 4号溝状遺構実測図

呈する本遺構にあって小規模ながらも、「ずれ」を生じていた。

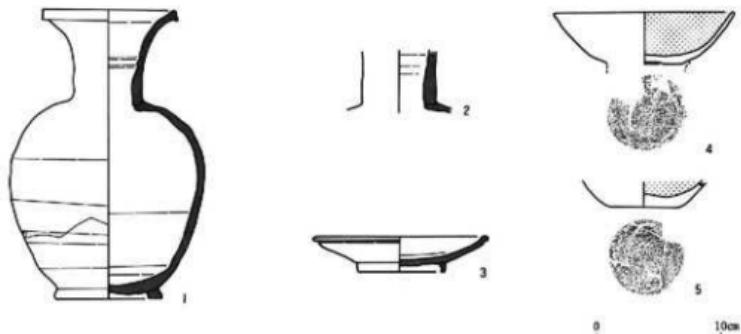
更に、南側遺構確認箇所から 41.1 m の地点で一旦立ち上がって終息し、そこから北へ 4.4 m の間隔を開けて遺構の落ち込みが始まる。この遺構未構築箇所には、緩やかな傾斜に添って西方より下降する、2、3 号溝状遺構が直行する。両遺構については本章内で後述するが、堆積土の下部に砂礫を多量に含むことから小河川の流路と推察され、明らかに遺構未構築箇所はそれらとの直接的な交わりを回避するための防御策として、両遺構幅を考慮した空白地帯と考えるべきものであろうか。

何れにせよ、開田等における、遺構構築面の削平及び攪乱により、正確な規模形状は確認できないが、おおよそ一定の規格による、かなり整った規模、形状であったと推測する。

次に覆土であるが、基本的には 5~8 層の黒色及び黒褐色の、シルト及び細砂を主とする粒子の細かな土質で、かつ基盤層の黄褐色土（ローム）の粒子を多く含み炭化物の混入は極めて少ない。締まりは一定で強く、底面と側面との接点箇所には黄褐色土の粒子が特に多量に含まれ、ある程度の年月による自然堆積が予測できるが、人為的な土砂の埋め込みや埋土の除去等は確認できなかった。また遺物の混入も各層で確認できたが何れも小破片であり、土量に対しても量的に少ないと言える。しかし、遺構未構築箇所を境とし、北側の覆土はこれとはまったく異としている。1~4 層の黒色、黒褐色、褐灰色を基準とするシルト、細砂を主とする点は大きな差はないが、粗砂及び円礫を多量に含み、黄褐色土の粒子はほとんど見られなくなる。また、断面 B-B' ライン近くまでの 6、7 層内にも、粗砂及び円礫の混入割合が高くなっている。これらの諸特徴は、2、3 号溝状遺構内堆積土とほぼ一致するものであり、両遺構からの運搬土が本遺構内に流入した可能性が高く、両遺構の埋没とほぼ同一時期に本遺構も埋没したものと推測する。断面 E-E' ラインでその状況が観察できた。そして、本遺構より出土した遺物の大半が両遺構の接点に近い、2、3 層内より破片となって出土していた（第 5 図）。

遺物（第 8 図、第 2 表） 灰釉陶器は長頸壺（1・2）、壺（3）、須恵器は壺、高台付壺、蓋が、土師器は甕、壺（5）、鉢（4）が出土した。遺物は前述のとおり、遺構の北部 2、3 層内から主に集中し、復元可能な物も破片として出土している。

3 の皿は、内面中央部に摩耗状況を確認でき、更に極めて僅かながら、炭化物もしくは墨のような黒色の物質が付着する。転用窓の可能性も充分考えられる。



第 8 図 4 号溝状遺構出土土器状況実測図

第2表 4号溝出土器観察表

番号	器種	法量	器形の特徴	測量	備考
1	長頸壺	10.9 8.8 23.9	頸部は長く口縁は朝顔型に開き、腹部は折り返し作成され、帯を形成する。肩部の張りだしは圓く、腹底が球形を呈する。	外面-ロクロナデ後、肩部中央から下部にかけてヘラケズリ 底部は糸切り後 高台貼り付け、更にナデ 内面-ロクロナデ	胎土中小石・砂粒まばらに含む。 灰白色(10 YR 8/1) 焼成良好 灰オーリブ色(7.5 Y 5/2)の自然釉付着
2	長頸壺	— (5.1)	頸部は長く口縁は朝顔型に開く形状と思われる(1と類似する)。	外面-ロクロナデ 内面-ロクロナデ	胎土中小石・砂粒まばらに含む灰白色(10 YR 8/1) 焼成良好 灰オーリブ色(7.5 Y 5/2)の自然釉付着
3	皿	14.4 7.0 3.0	体部は直線ぎみに開き、口縁端部齊状に外反する。 東内面中央部に摩痕を確認。更に輪わざかだが、炭化物付着。転用確か?	外面-ロクロナデ、底辺回転ヘラケズリ 内面-ロクロナデ	胎土に砂粒を含む。 灰黄色(2.5 YR 7/2)焼成良好 浅黄色(2.5 Y 7/3)の釉付着(濁けがけ?)
4	碗	(14.8) 6.1 4.2	体部はやや内湾ぎみに立ち上がる。	外面-ロクロナデ 底部回転糸切り後高台 貼り付け、更にナデ 内面-ミガキ、黒色処理	胎土に砂粒を含む 2.5 Y 6/2(灰黄色) 焼成良
5	环	— 5.9 2.0		外面-ロクロナデ、底部回転糸切り 内面-ミガキ、黒色処理	胎土に雲母、砂粒を含む 10 YR 6/4(よい黄褐色) 焼成良

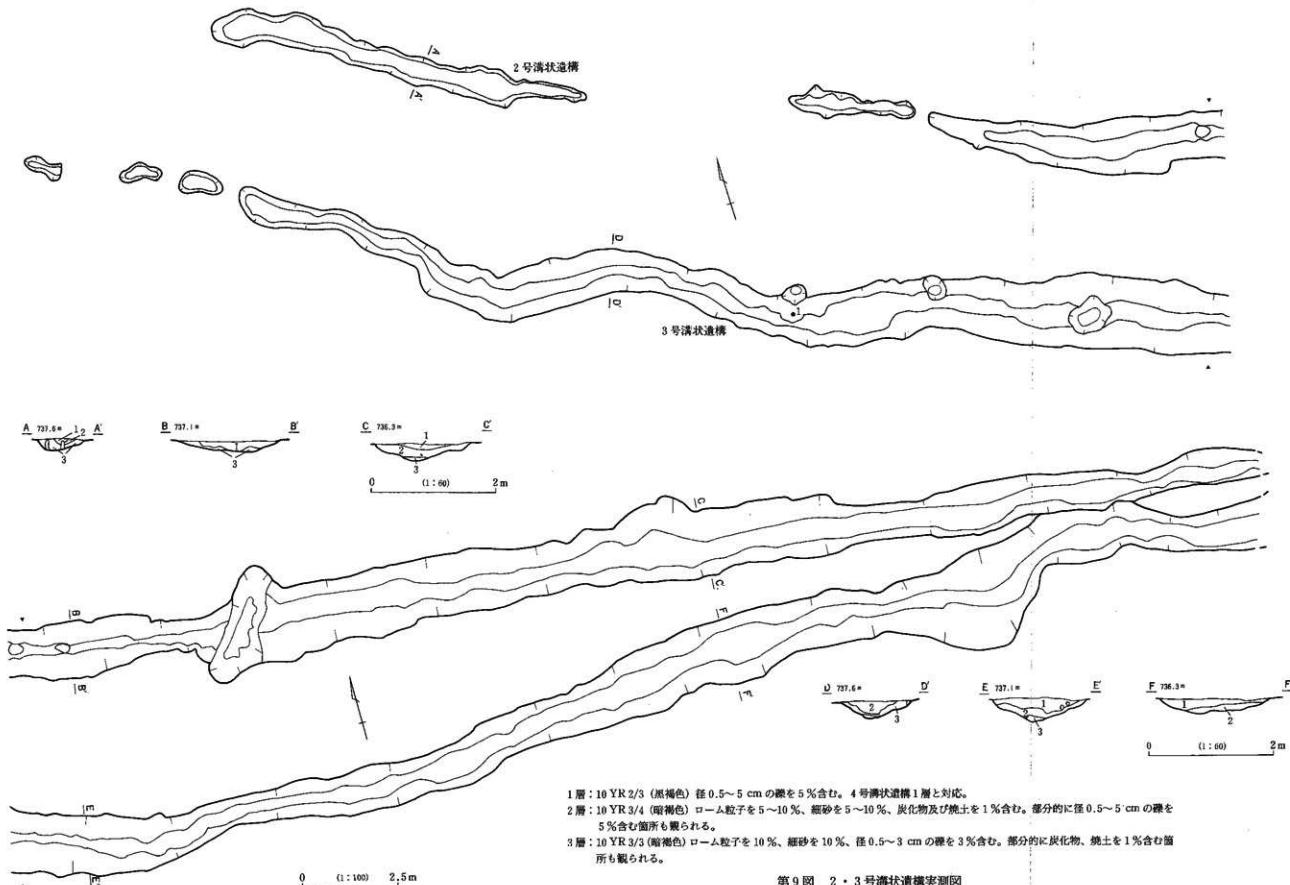
これらの特徴から、本遺構は平安時代前期、およそ9世紀後半に時期判定を考える。

## 2. 2・3号溝状遺構

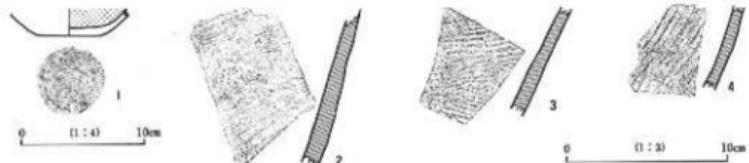
遺構(第9図) 第1調査区の西部から中央部にかけて、E・F-1~7グリッドの範囲で、直線にして70.5mの検出に留まった。比較的の残存状況の良い土壟断面C-C'ラインで1.8m、F-F'ラインで1.7mの幅を、わずか数センチから最大0.4mの深さを確認した。その断面形は、逆三角形もしくは皿状を呈し、検出箇所によって様々な形状を示しており、部分的に土坑状の小穴も存在する。両遺構は堆積土の観察から、3層からなる黒褐色シルト、細砂、粗砂、小円礫と、ほぼ一定の堆積順序を示している点を考慮し、小河川もしくは沢地としての自然的流路であったと推察する。

両遺構は、調査区の西端部より部分的な検出に至り、わずかにその痕跡を示す遺構下部のみや、粗砂や小礫のみの検出でその存在を確認した。進路は、西から東の方向に流れ、約4m幅の間隔でほぼ並行に条を成し、西端部検出箇所からおよそ20m付近で緩やかに左側へ曲がり、そこからほぼ直線に進む。E-7グリッドで一端接触した後、更に分離してそこから東方に延びる状況を示していた。これは、開田による削平等の旧地形の変化で確かではないが、本来進路が旧地形に併せていたことを示す状況を推察することが妥当かと思われる。また、現状では町道にて寸断された形であったが、町道東脇の土手の下部より両遺構の残存状況が一部確認できたが、それ以東では開田による削平が著しく、明確にその痕跡を追うことができなかった。しかし、本章にて後述する8号溝状遺構が、両遺構の何れかとが継続する可能性を示唆したい。

覆土は、前述のとおりであるが、更に2、3層からは黄褐色土(ローム)の粒子をまばらに、わずかながら炭化物と焼土を検出している。また、主体となる黒褐色シルトとそれに多量に含まれる粗砂及び円礫とが、4号溝状遺構の北側堆積土とほぼ一致している点は、ある一定の期間における運搬物を伴う氾濫を示す状況も示唆できよう。



第9図 2・3号溝状造構実測図



第10図 2・3号溝状遺構出土土器実測図、拓影図

第3表 3号溝状遺構出土土器観察表

番号	種類	法線	器形の特徴	調査型	備考
1		5.2 (2.2)		外面一ロクロナ、底部切欠き 内面ミガキ、黒色施釉	胎土に茶色の砂粒を含む 灰白色 (10 YR 8/2) 焼成良好

遺物（第10図） 灰釉陶器は長頸壺？、皿もしくは碗、須恵器は壺、甕（2～4）、土師器は壺（1）、甕、小型甕が出土し、ほとんどが固化できない破片のみで、かつその量も少ない。各土器の所特徴と、その器種構成から、4号溝状遺構のそれと大きな違いは観られない。

従って、本両遺構との接触状況を加味したと思われる4号溝状遺構の構築状況とを念頭におき、両遺構は平安時代前期、それも4号溝状遺構築造以前から存在していたことを示唆したい。

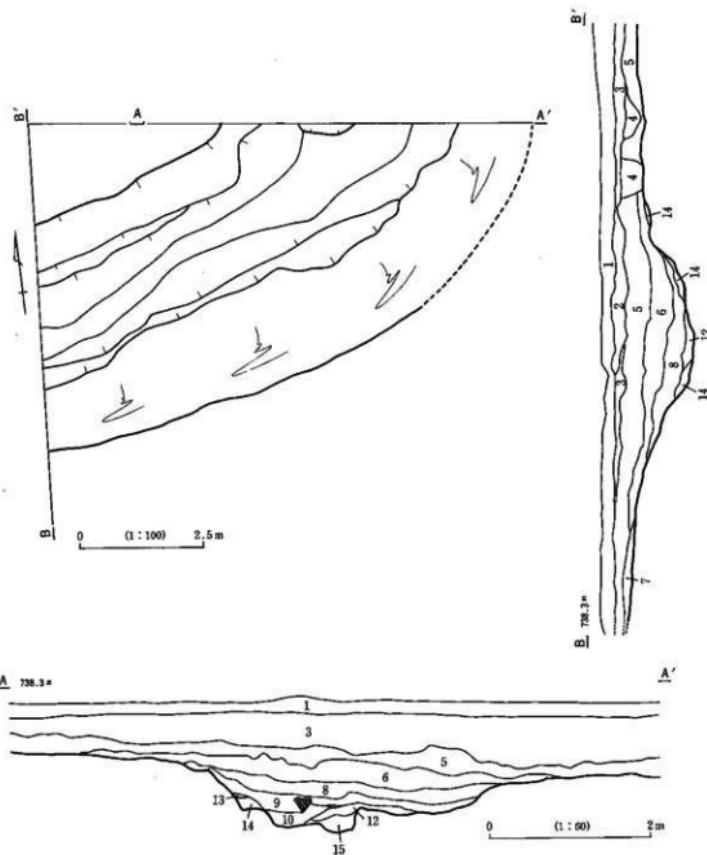
### 3. 1号溝状遺構

遺構（第11図） 第1調査区の北西コーナー部、D-1・2グリッドに位置する。直線にして12.5mの検出に留まり、確認幅4.8～5.5m、遺構確認面より1.5～1.8mの深さを測る。部分的な擾乱により、遺構を明確に検出できない箇所があり、更に調査区内に検出できたのは遺構全体のほんの一部分であることから、元地形の傾斜を考慮してN-66°-E方向に進路を捕るものと思われる。

規面は緩やかな傾斜を呈しているが、部分的に整った面を残している。しかし覆土については後に詳細に述べるが、可動当時の水流による圧力と土砂等の運搬物との接触で、かなりの箇所が侵食を受けたと考えられ、わずかながら遺構の進行方向に並行して規面に段部が形成されていたり、細かな凹凸や溝を確認している。また低面も大きく二筋に分かれ、その接点となる箇所には中州状の凸部が残り、部分的に砂礫のみが堆積する小穴も見られ、全体的に堅く叩き締められた様な痕跡があった。恐らく中州状の箇所が、本来遺構の築造もしくは機能当初の底面部であったと推測する。

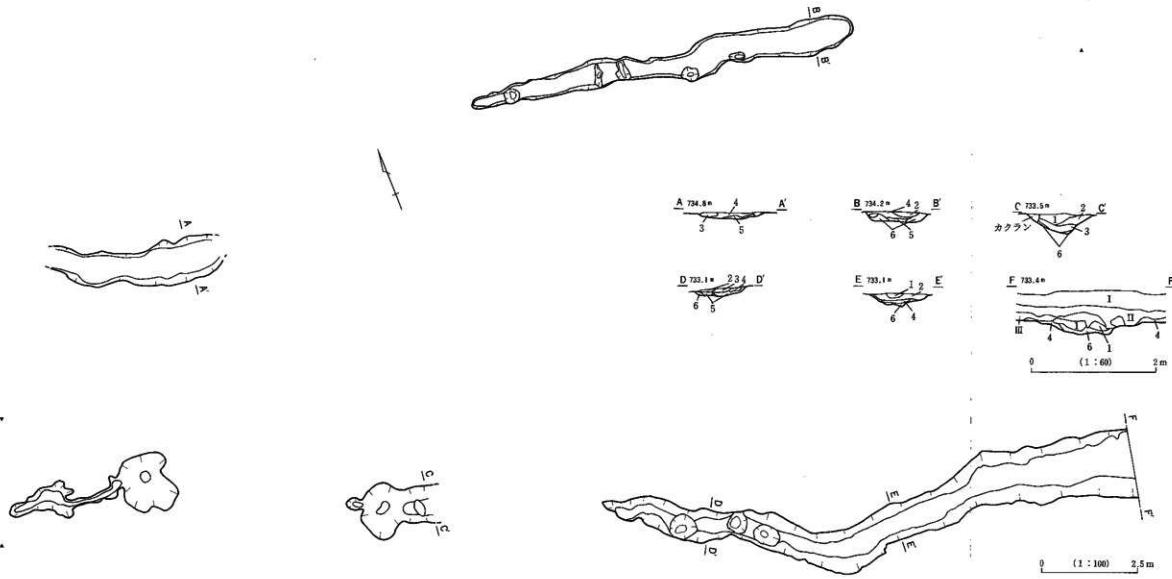
遺構の検出は、基本土層第V層を基盤とし、第IV層と同質の自然堆積土（7層）に被覆され、覆土は7分層確認した。遺構内堆積土を概観すると、全体的に基盤層の第V層と同じローム（テフラ）粒子を10～50%の割合で含んでいる点が大きな特徴と言える。また、下層ほど細砂・粗砂・小砾の割合が大きくなり、最下層の15・16層ではこれらが主流を占めてくる。

前述したとおり、ローム粒子は規面または底面の侵食されたことにより堆積土内に多く含まれ、下層ほど砂礫が多く堆積するなど、ある一定の年月または期間で強弱ながら水が流れていることを裏づけるできる。何れにせよ、自然もしくは人為的に構築された水路状遺構であり、7・9層内に平安時代と思



- 1層：基本土層第I図  
 2層：10 YR 4/4（褐色）径3～10 cmの礫を50%以上含む。  
 砂層である。  
 3層：基本土層第II図に対応。  
 4層：10 YR 2/2（黒褐色）径5～15 cmの礫を50%以上含む。  
 砂層である。  
 5層：基本土層第III層に対応。  
 6層：7.5 YR 2/2（黒褐色）ローム粒子を5%含む。  
 7層：基本土層第IV層に対応。  
 8層：10 YR 2/3（黒褐色）ローム粒子及びロームブロックを10%含む。  
 9層：10 YR 2/2（黒褐色）ローム粒子を20%、細砂を10%含む。
- 10層：10 YR 3/3（暗褐色）ローム粒子を30%、細砂を10%含む。  
 11層：10 YR 5/6（黄褐色）ローム粒子を50%以上含む。  
 12層：10 YR 3/2（暗褐色）ローム粒子を10%、径0.5～5 cmの礫を10%含む。  
 13層：10 YR 3/2（黒褐色）ローム粒子を30%、粗砂を20%、径1～3 cmの礫を30%含む砂層である。  
 14層：10 YR 4/4（褐色）ローム粒子を30%、粗砂を30%含む。  
 15層：10 YR 3/3（暗褐色）ローム粒子を10%、径0.5～10 cmの礫を50%以上含む。

第11図 1号溝状遺構実測図



われる内面黒色処理の土師器の小片数点を出土したが、下層からはまとまった遺物は無であり、残念ながら遺構の築造及び可動時期を示す大きな根拠は得られなかった。

#### 4. 8号溝状遺構

遺構（第12図） 第1調査区の北東箇所、E-9~14、F-14~15グリッドの、直線距離にしておよそ58mの範囲で検出した。開田により、上面から底面までも削平が観られ、2・3号溝状遺構ほど明確な検出はできなかった。しかし、部分的ながらも緩やかに蛇行する軌道の状況は確認でき、幅及び深さ、断面形状と底面の堅さ・凹凸の状況、更に覆土の内容等、2・3号溝状遺構の諸特徴とほぼ一致する。同遺構がD-8・9グリッド地点で削平が著しく、その軌道が途切れてしまうが、進路方向もほぼ一致する事から、その何れかが本遺構に継続するものと推察する。遺物の出土も小量ながら、同遺構にほぼ共通する。

#### 5. 7号溝状遺構

遺構（第13図） 第1調査区の中央北部、D・E-8グリッドに位置する。本遺構検出箇所が最も開田による削平された形跡が強く、削平面が検出面であり、遺構の南部は底面まですべて破壊され、確認距離12.5m、幅が4.5~0.5mと一定せず、最も保存状況の良い断面確認A- $\bar{B}$ ライン箇所で最大確認幅箇所で38cmの深さを確認できたに過ぎなかった。元地形の傾斜から、N-15°-E方向に進路を有するものと考えられる。

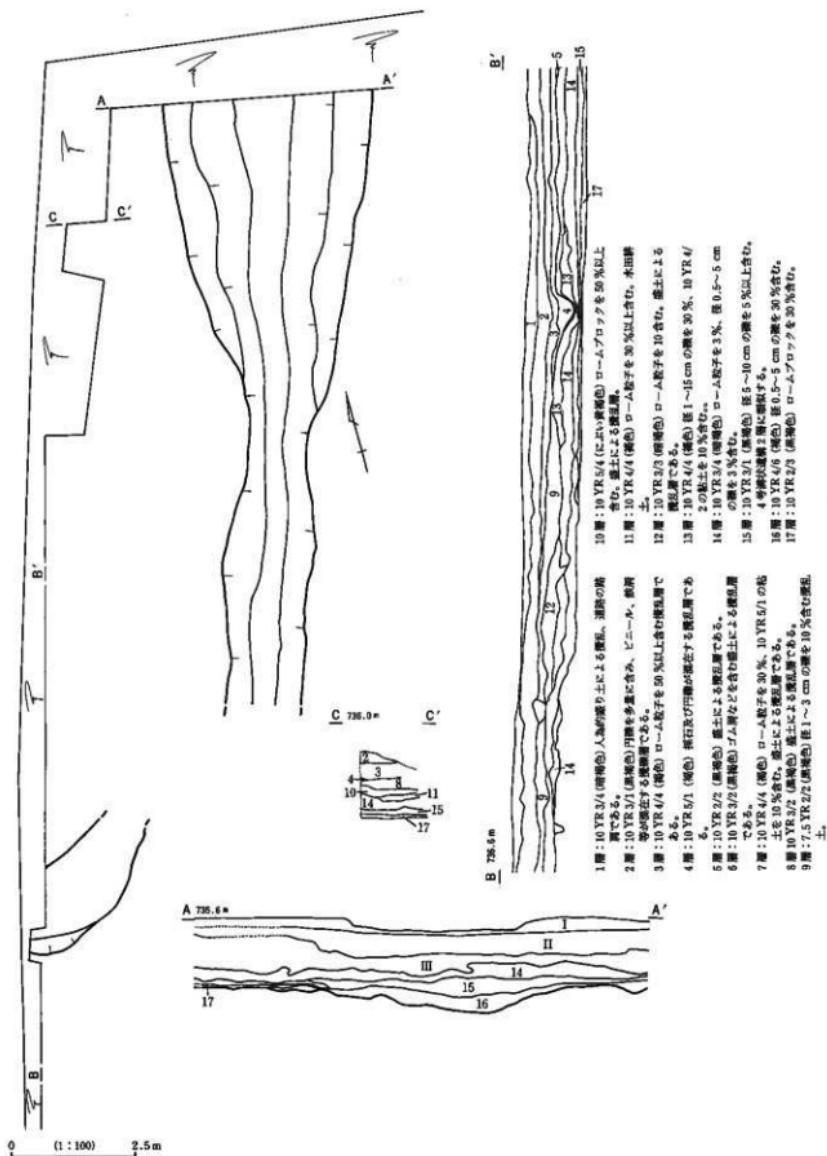
遺構の特徴としては、最大確認幅に対し僅か38cmと浅く、かつ底面との規面との差が不明確な箇所が多かった点が上げられる。また部分的に規面に稜部を確認できる箇所もあった。しかし、底面部が基盤である第V層より更に下部の砂礫層にまで及んでおり、礫土を主とする覆土との混在することも手伝って、検出と掘削により悪条件が重なる不十分な結果となってしまった。覆土は2層からなり、粗砂からゴルフボール大の円礫を多く含む黒褐色礫土層である。縮まりはさほどなく、断面B- $\bar{B}$ ラインの層と、2・3号溝状遺構及び4号溝状遺構北部の堆積土と類似性が強い。堆積物の中に土器等の遺物はまったく無く、直接遺構の時期判定を下す根拠は見いだせなかっただ。しかし堆積土の類似性を僅かな手がかりとするならば、同遺構と大きな時間差は感じられない。尚、本遺構の両脇には、他の基盤確認面より堅固な状況を示していた。特に東側には、住居址の床面に見られる粘土を貼り固めたような形跡のある硬化面であり、削平により部分的な検出でその範囲は明確に追うことができなかっただ。また僅かながら残る上部土中からも、遺物の出土はみられなかっただ。

西側の硬化面は、東側のそれと同じ貼り床状の堅い粘土がほとんど無く、基盤層の第V層及び下層の礫層の上部に部分的な黄褐色土が乗った、叩き締められた形跡の薄い硬化面であった。更に、東側のそれとは若干硬度に違いを感じた。また、硬化面の範囲としては、断面B- $\bar{B}$ ラインに2・3号溝状遺構が段差として確認できる、D・E-8グリッドまでの検出であった。

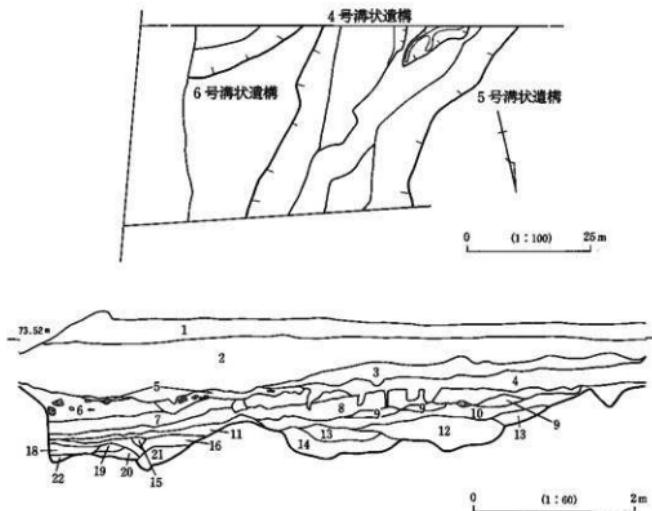
両硬化面については、第V章にて所見を加えたい。

#### 6. 5・6号溝状遺構

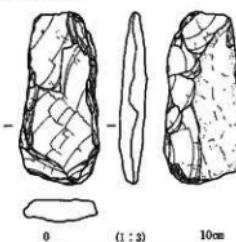
遺構（第14図） 第2調査区、A-7・8グリッドに位置する。5号溝状遺構は、3層からなる覆



第13図 7号溝状遺構実測図



- 1層：10 YR 2/3（黒褐色）土手及び畑の耕土である。
- 2層：10 YR 3/1（黒褐色）と10 YR 6/6（明黄褐色）が混在。人為的堆積土。
- 3層：10 YR 2/2（黒褐色）
- 4層：7.5 YR 2/3（極暗褐色）細砂を10%含む。
- 5層：10 YR 2/2（黒褐色）酸化鉄及び酸化した植物根を10%含む。堅固緻密。
- 6層：7.5 YR 2/3（極暗褐色）4層と極似した土質であるが、径10cmの礫を5%含む。
- 7層：10 YR 2/3（黒褐色）粗砂を20%含む。
- 8層：10 YR 3/1（黒褐色）粗砂を20%含む。
- 9層：10 YR 2/3（黒褐色）2.5 YR 4/4（オリーブ褐色）を30%、径0.3~5cmの礫を40%含む。砂礫層である。
- 10層：10 YR 2/3（黒褐色）細砂を30%含む。
- 11層：2.5 YR 3/3（暗オリーブ褐色）細砂を30%含む。
- 12層：10 YR 3/3（暗褐色）砂礫層である。
- 13層：2.5 YR 3/3（暗オリーブ褐色）細砂を30%含む。
- 14層：10 YR 4/6（褐色）細砂を30%含む。
- 15層：10 YR 4/6（褐色）細砂を50%含む。
- 16層：10 YR 5/6（黄褐色）細砂を30%、径1~3cmの礫を20%含む。
- 17層：10 YR 2/3 8（黒褐色）径1~3cmの礫を30%含む。
- 18層：10 YR 4/4（褐色）10 YR 5/6（黄褐色）のシルトを10%含む。
- 19層：10 YR 4/4（褐色）10 YR 6/6（明黄褐色）のローム粒子を10%、細砂を30%含む。
- 20層：10 YR 3/4（暗褐色）10 YR 6/6（明黄褐色）のローム粒子を30%、細砂を30%含む。
- 21層：10 YR 4/4（褐色）10 YR 5/4（にぶい黄褐色）のローム粒子を30%、粗砂から径3cmの礫を50%以上含む。
- 22層：10 YR 3/2（黒褐色）10 YR 6/6（明黄褐色）のローム粒子を5%、径3~5cmの礫を30%含む。



第14図 5・6号溝状遺構実測図・出土石器実測図

第4表 5号溝状遺構出土石器観察表

番号	器種名	石質	法量	重量	特徴	備考
1	打製石斧	粘板岩	10.8 5.0 1.4	97.0	一部に後退をみせるが、偏刃の短筒型に属する。土砂や流水により、全体的に侵食が進む。	

土に含まれる粗砂及び円礫の状況と、塊面と底面の諸特徴が、1号溝状遺構に類似点の多いことから、自然もしくは人為的な構築による溝状遺構と考える。確認距離はおよそ5m、幅2.8m、深さ0.75mで、進路方向も偶然ながら1号溝状遺構と類似する。6号溝状遺構も堆積物から、同様の遺構と思われる。

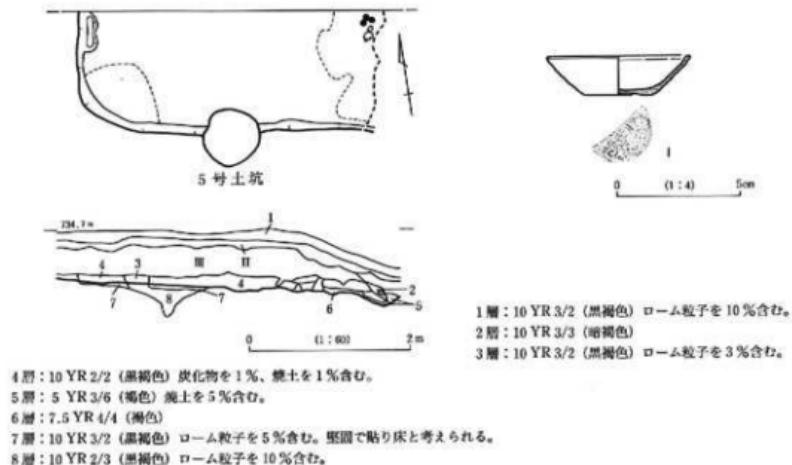
尚、5号溝状遺構底面から打製石斧（1）が1点出土しているが、その他は無であり、遺構の築造及び機能時期を判定することはできない。

## 第2節 住居址

遺構（第15図） 調査区の北東、D-11・12グリッドに位置する。N-100°-Eにはば主軸を指す。南北が1.5m、東西が3.2mの範囲のみが検出できた。東壁中央部にカマドを備え、隅丸方形を呈するプラン形状と思われる。壁残高は5cm余りで、ほとんど開田時に削平されている。

カマドは、焼土ブロックと火焼面の一部が検出したのみで、ほとんど残骸としての状況であった。

覆土は3分層され、炭化物と焼土が混入する少ない黒褐色または褐色の比較的単一的な上質であった。床は全体的に堅固に叩き締められ、中でもカマドの前面が著しい。貼床及び貼床下の埋土も2分層で



第15図 1号住居址、出土土器実測図

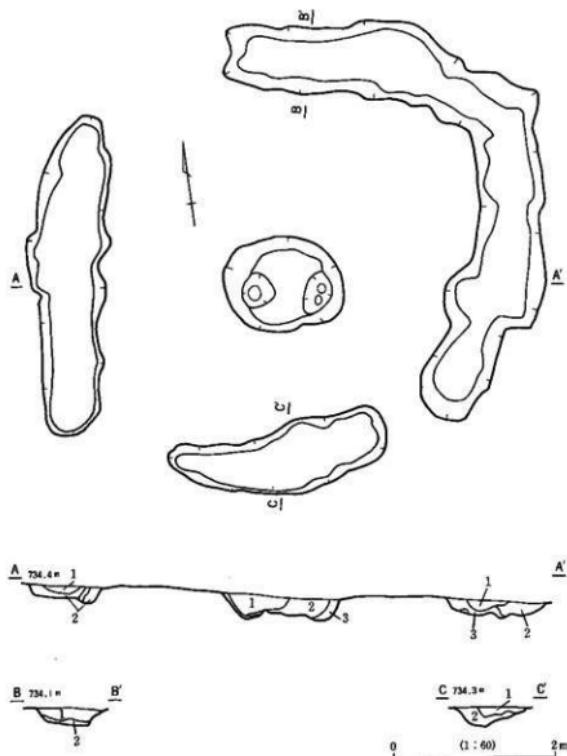
第5表 1号住居址出土土器観察表

番号	器種	法量	器形の特徴	調査	備考
1	坏	(11.8) (5.6) 3.2	体部はほぼ直線的に外反する	外面—ロクロナデ、底部削転糸切り 内面—ロクロナデ	粘土中に乳白色の砂粒をまばらに含む 烧成良 灰オーリーブ色(5Y 6/2)

き、貼り床は主にカマドの前面に施される。

遺物(第15図) 須恵器は坏(1)が、土師器は甕、坏が出土した。まとまった遺物はなく、僅かな小破片のみが残存していたに過ぎない。

これらの特徴から、本址は平安時代に時期判定を考える。



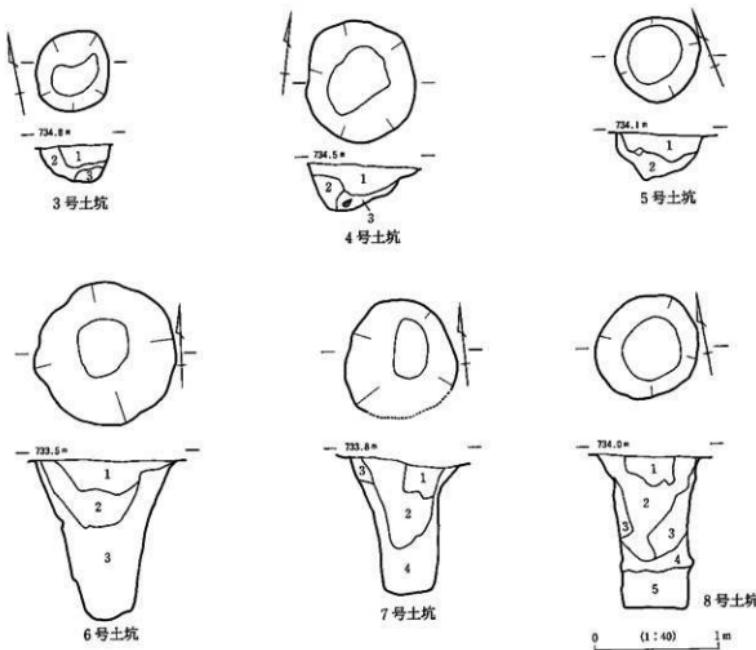
1層: 10 YR 2/3 (黒褐色) ローム粒子を 1% 含む。  
 2層: 10 YR 3/2 (黒褐色) ローム粒子を 3%、炭化物を 1% 含む。  
 3層: 10 YR 5/6 (黄褐色) ローム粒子を 50% 以上含む。

第16図 方形周溝状遺構実測図

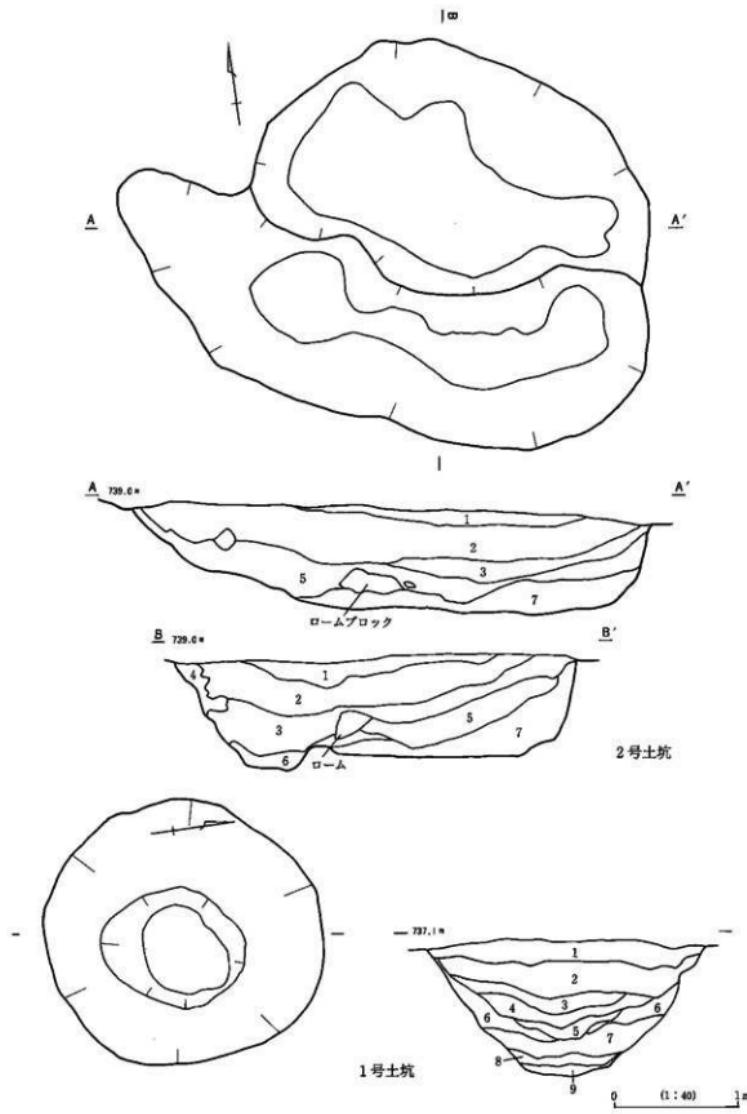
### 第3節 方形周溝状遺構

**遺構(第16図)** 第1調査区の東部、F-10グリッドに位置する。南北5.9m、東西6.4mの範囲で幅1.0~1.2m、深さ0.3~0.4mで、「L」字状と直線の2種の溝で周溝状の囲みが形成される。囲まれたほぼ中央部には、平面1.3×1.2m、深さ0.4mの円形の土坑状小窪穴が見られる。各溝の形状は一定せず、深さもまちまちで、底面も凹凸が目立ち、これも一定していない。

覆土は3分層されるが、第IV層に近似した余り特徴のない土質で、遺物の混入もない。近隣での検出例と形状に類似点がある他は、「方形周溝墓」としての決定的根拠に欠ける。



第17図 土坑実測図 1



第18図 土坑実測図 2

## 第4節 土 坑

**遺構 (第17・18図)** 調査区から8基の土坑を検出した。土坑は、規模・形状・内部構造等の諸特徴により、大きく3つのタイプに細分した。これにより、各土坑の用途・性格が異なると思われる。また、各土坑から、遺物の出土はみられなかった。

### A類 (3・4・5号土坑)

円形・梢円形を呈し、直形が1.0m前後の、比較的深さの浅いものを本類とした。壁面は不規則で底

第6表 土坑一覧表

番号	平面形	断面形	規模	覆 土	縫まり	粘 性	備 考
1	円 形	半円形	230 214 101	1層 7.5 YR 2/2 (黒褐色) ロームブロックを3%、炭化物1%含む 2層 7.5 YR 2/1 (黒色) ロームブロックを10%、炭化物1%含む 3層 7.5 YR 3/2 (黒褐色) ロームブロック50%が混在 4層 10 YR 3/2 (黒褐色) 7.5 YR 2/1を2%、ロームブロックを2%含む 5層 7.5 YR 2/2 (黒褐色) 10 YR 3/4を10%以上含む 6層 7.5 YR 2/1 (黒色) ローム粒子を50%以上含む 7層 10 YR 3/2 (黒褐色) 8層 10 YR 2/2 (黒褐色) ローム粒子を20%以上含む 9層 10 YR 2/6 (褐色)	弱 弱 弱 弱 中 弱 弱 強 強	中 中 中 強 強 強 強 強 強	遺物なし D-3
				1層 10 YR 2/3 (黒褐色) ローム粒子を3%、炭化物1%含む 2層 10 YR 2/2 (黒褐色) ローム粒子を1%含む 3層 10 YR 2/2 (黒褐色) ローム粒子5%、炭化物1%含む 4層 10 YR 4/6 (褐色) 5層 10 YR 3/3 (暗褐色) ローム粒子10%含む 6層 10 YR 2/2 (黒褐色) ローム粒子10%含む 7層 10 YR 2/1 (黒色)	中 中 中 中 弱 弱 強 強	中 中 中 中 強 強 強 強	
				1層 10 YR 2/3 (黒褐色) 径1cmの礫を1%含む 2層 10 YR 2/3 (黒褐色) ローム粒子を10%以上含む 3層 10 YR 4/4 (褐色) ローム粒子を50%以上含む	強 強 弱	中 中 強	
				1層 7.5 YR 2/3 (黒褐色) 径0.5~3cmの礫を2%含む 2層 10 YR 4/4 (褐色) 径0.5~3cmの礫を2%含む 3層 10 YR 3/4 (暗褐色) 径3~5cmの礫を5%含む	強 強 中	強 中 強	
				1層 10 YR 2/2 (黒褐色) 径0.5~3cmの礫を2%含む 2層 10 YR 4/6 (褐色) ローム粒子10%、径0.5~3cmの礫2%含む	中 中	中 中	
				1層 10 YR 3/3 (暗褐色) 炭化物を1%ローム粒子を5%含む 2層 10 YR 2/3 (黒褐色) 炭化物を2%含む 3層 10 YR 5/8 (黃褐色)	中 中 弱	中 中 弱	
				1層 10 YR 2/3 (黒褐色) 径1~5cmの礫3%、ローム粒子5%含む 2層 10 YR 2/1 (黒色) 径1~10cmの礫5%ロームブロック3%含む 3層 10 YR 4/3 (にじみ黄褐色) ローム粒子3%含む 4層 10 YR 4/4 (褐色) 径3~10cmの礫3%、ローム粒子30%含む	強 強 強 強	中 中 中 中	
				1層 10 YR 2/2 (黒褐色) 2層 10 YR 3/3 (暗褐色) ローム粒子を10%含む 3層 10 YR 4/4 (褐色) ローム粒子を30%含む 4層 10 YR 5/8 (黃褐色) ローム粒子を50%含む 5層 10 YR 4/6 (褐色) ローム粒子を20%含む 6層 10 YR 4/4 (褐色) ローム粒子を50%含む	強 中 弱 弱 弱 強	中 強 強 強 強 中	
8	円 形	台 形	86 80 127	1層 10 YR 2/2 (黒褐色) 2層 10 YR 3/3 (暗褐色) ローム粒子を10%含む 3層 10 YR 4/4 (褐色) ローム粒子を30%含む 4層 10 YR 5/8 (黃褐色) ローム粒子を50%含む 5層 10 YR 4/6 (褐色) ローム粒子を20%含む 6層 10 YR 4/4 (褐色) ローム粒子を50%含む	強 中 弱 弱 弱 強	中 強 強 強 強 中	遺物なし E-11

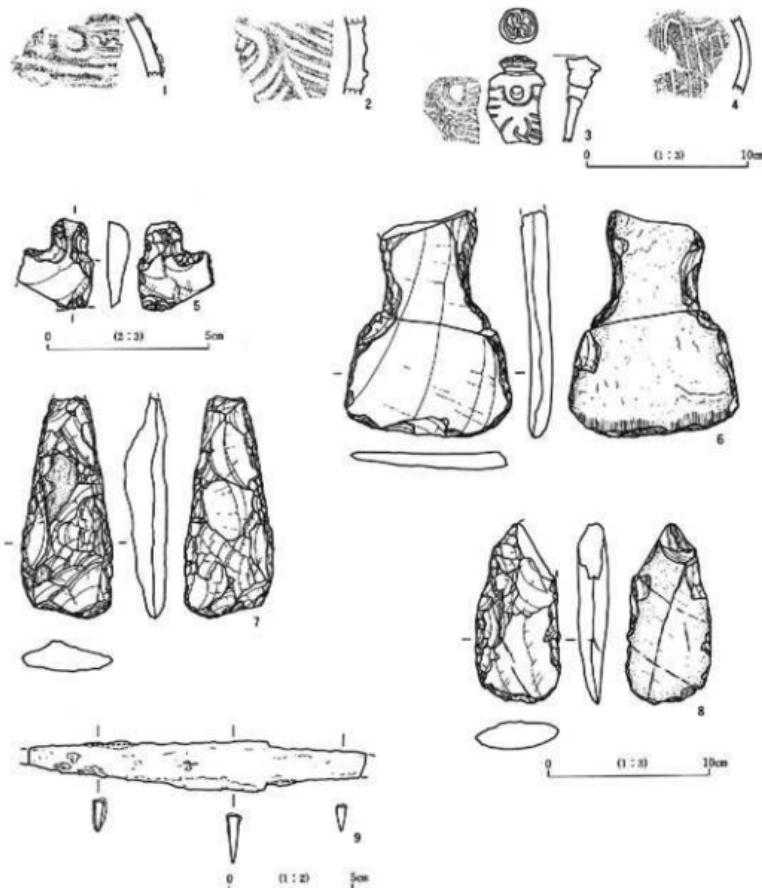
面は凹凸が目立つ不整形な形状である。覆土は、単複様々で規則性には欠ける。

B類（6・7・8号土坑）

平面プランが整った円形を呈するもので、円筒状にはば垂直に深く掘り込まれ、底面は平坦で壁面も丁寧に整えられる。また覆土の堆積は、比較的順層する。

C類（1・2号土坑）

大型のものを本類とした。覆土の堆積は順層するが、締まりは上記各類より弱く、擾乱層に見られるロームブロックを多く含むのが特徴。



第19図 遺構外出土遺物実測図、拓影図

## 第5節 遺構外出土遺物

図化可能なものとして、土器は縄文土器（1～4）が、石器は石匙（5）、打製石斧（6～8）、鉄器は刀子（9）が出土し、他に近世陶磁器、古錢、近・現代の陶器、ガラス等が見られた。1・2は、中期後葉の唐草文系の深鉢片で、3・4は後期の「堀之内式」もしくは「加曾利B式」の諸特徴が観察される。

第7表 遺構外出土鉄器觀察表

番号	器種名	法量	重量	特徴
9	刀子	(13.8) 2.2 0.5	22.8	平棟平作り。切先及び茎尻が欠損する。茎も刀身同様に断面三角形を呈する。

第8表 遺構外出土石器觀察表

番号	器種名	石質	法量	重量	特徴	備考
5	石匙	チャート	2.8 (2.2) 0.6	3.8	大半が欠損しているため、形状及び刃部の作出等、特徴はつかめない。	
6	打製石斧	泥岩	(14.1) 10.5 1.5	220.0	偏刃の分銅型に属す。両面共、自然面もしくは核から打削した剝離面を残し、側縁及び刃部のみ調整を加えて形状を作出している。また、刃部に近接する片側面に使用痕を示す摩耗が観察できる。	上部欠損
7	打製石斧	泥岩	(13.8) 5.5 2.3	178.0	偏刃の撥型に属す。刃部は、一部に使用過度を示す後退が認められ、使用痕を示す摩耗も観察できる。片面一部に、自然面を残す。	頂部欠損
8	打製石斧	硬砂岩	(11.2) 5.2 1.9	118.0	全体の形状が不明であるが、円刃の短冊型に属すると思われる。裏面は、自然面利用し整形を行っていない。	上部欠損

## 第V章 まとめ

今回行った中部電力松島変電所の施設増設工事に伴う埋蔵文化財記録保存事業において、前述のとおり縄文時代・平安時代の多数の遺構・遺物が検出された。本遺跡は、深沢川の右岸に帶状に広がる、堂地遺跡に代表される遺跡群に属し、特に平成6年度に実施した、上記開発事業先立つ試掘調査の時点での地元を始めとする各報道機関の発表により、多くの注目を集めることとなり、今回の本調査では、その動向に県内外から更なる関心を寄せられる中での調査の実施であった。本章では、今回出土した各遺構・遺物について若干の考察をつけ加えると共に、特に平安時代を中心とした各遺構間の関係と、全体像を模索した中での問題点や疑問点を提示することにより、本遺跡の意義・性格等をより多くの研究者の方々に推論していただく一助となることを望み、本書のまとめとしたい。

### 1. 平安時代の遺構・遺物について

調査区内で検出した7条の溝状遺構、並びに住居址が、築造時期及び機能を果たしていたと考えられる時期が特定できるまとまった遺物を排出し、また各遺構の重複関係でおおよその時期判定を推察できた。中でも各溝状遺構は、第2次大戦以前に行われた構造改善により、各遺構の多くがかなりの破壊を受けたにも関わらず、広範囲に渡る調査によって、その経路や性格を推察するのに最低限度の情報を得ることができた。それらは、人工的・非人工的なものとおおよそ大別できようが、出土遺物の概観により、ほぼ同一時期もしくはかなり近接した時間の中で機能していたことも、おおよそ示唆できる。

4号を除く各溝状遺構は、堆積物に多くの砂礫と基盤となるロームの粒子を含み、水流により低面には浸食状況を示す凹凸が、規面には筋状の段部を残すことから、小河川または沢地としての役割が考えられる。しかし、2・3号溝状遺構は緩やかに蛇行する流路の状況と溝幅が一定化しないことから、東方に緩やかに傾斜する推定古地形の、それも調査地を中心としたわずかに高い尾根地形の中心部を流れる、出土遺物から推察する9世紀後半に存在した非人工的な自然遺構であったに違いない。そして両遺構の何れかが、一端は途絶えた形となった8号溝状遺構に継続するものと思われる。

一方1号溝状遺構は、僅かながら検出であったが、尾根から北東方向にその進路をとり、深沢川の突端部との間に概観できる僅かながらの谷地形へと向かっている。そして上記両遺構とは対象的に、進路は愚か、溝幅と深さから観る規模形状とも大型で異なっており、人工的構造物としての疑いを捨てきれない。しかし時期を判別する出土遺物もなく、その内容に不明な点が多いが、進路方向がほぼ一致する、第2調査区で検出した5号溝状遺構と同一遺構として想定するならば、明らかに4号溝状遺構を切って破壊をしており、2・3号溝状遺構とも機能時期の新旧がはっきりする。それ以外のことは論じがない。

次に4号溝状遺構についてであるが、中世末期から近世初頭に軍用道路として造成されたとされる「春日道」「春日街道」(注1)と伝えられ、現在生活道路として使用されている舗装道路筋の西側にほぼ並行する形で検出している。また北方に離れた第2調査区に、これに継続すると思われる本遺構と諸特徴を共にする溝状遺構が存在する。上面確認幅・低面幅・深さ等、更に逆台形の断面形までがほぼ一定の

となる規模、形状を示している。また、低面の3ヶ所に僅かながらの段部が確認でき、特に断面B-B'ラインでは低面のみならず、規面から上面の縁までその段部が続き、直線に走る本造構内にあって、一種の「ずれ」を生じている。これが、造構の機能もしくは構造状の何らかの意味か目的を示すものか、または築造段階における作業工程に、偶然にこのような状況で完成してしまったものか、何れにせよ人工的構造物として考察するにあたり、大きな手がかりであることは違いない。

そして第4章内でも述べたとおり、2・3号溝状造構との接触部に意図的とも思える造構未構築部が存在する。ちょうど両造構との直接的交わりを避けることを意識したかのように、造構が途切れている。結果的には、両造構の氾濫により水と土砂の流入を招き、特に途切れた北側の造構内はそれによる埋没を引き起こしたと想定できる。それと同時に、両造構と同系統の堆積土石内から埋没時期を示唆できる、9世紀後半所産の光ヶ岡1号窯式に比定する灰釉長形壺や皿の出土が見られた。また自然堆積による埋没が考えられる南方地区からも数量は少ないが、上記長形壺と諸特徴を共にする頸部片や、土師器の坏・碗もそれらとほぼ同時期の所産物として観察した。

住居址については、わずか1軒のみの検出に留まり、造構の残存状況も悪く小量の出土遺物からは詳細な時期の判別はできない。今回は広範囲に渡る調査区であったが、住居址等の確認による居住区としての状況が不明確であった。他の溝状造構との関連性も不明確であり、堂地遺跡を中心として想定される居住域の南方限界地に当たるのかも知れない。何れにせよ7号溝状造構の東側からも、過去の類例にみられる住居址の貼り床と類似する、平坦な硬化面を僅かの範囲で検出しており、これを住居址の残存物としての見方もできようが、カマドや壁の立ち上がり、まとまった遺物の出土等住居址を想定する決定的な根拠は得られなかった。

## 2. 古代官道「東山道」としての諸問題について

6世紀から7世紀にかけて、我が国は律令制国家としての成り立ちがなされたとされている。中央政府は、地方との交通通信を密にすることにより、中央集権国家の強化を目的として、国家的規模で道路の建設を行い駅制・伝馬の制を敷き、交通の要所（駅家）をその路線に設けた。「延喜式」（927）には、当時の官道「東山道」の路線・駅家の様子が記されており、町内のどこかにその路線が通過し、「深沢駅」の位置について、多くの研究者によって様々な諸説が上げられている。

今回検出した4号溝状造構を含む「春日街道」が、「東山道」として前述した試掘調査時より注目を集め、直接現地を訪れた黒坂周平（長野県文化財保護協会会長）氏、木下 良（日本古代交通研究会会长）氏、並びに高橋美久二（滋賀県立大学助教授）氏らによって、道路造構、即ち「東山道」としての認定を示唆する見解を戴いた。県道及び「春日街道」と伝えられる現道を路線として、中道遺跡の所在する大出地区内に「駅家」、を想定する諸説を当初から唱えてきた柴 登巳夫（同町博物館長）氏は、今回の調査経過を踏まえて、4号溝状造構を「側溝」とし、舗装道路直下とその東側土手下部より検出した平坦な硬化面を「道路面」と推測し、「中段路線直進説設定の根拠」として、各造構の諸特徴を基に裏付けている（注2）。

既に各新聞社やテレビ局の発表では、「東山道が県下で初めて確認された」、と報じているが、飽くまでも今回調査した範囲は想定する路線部の一地点のみの確認であり、現舗装道路直下も未調査であり、官道の調査例では側溝や路面などに、修治の痕跡が残されているが、今回の調査結果ではその状況も確

認できなかった。更に、舗装道路東側土手下部より検出した硬化面は、土層断面確認により2もしくは3号溝状遺構が、想定路面を横切っており、溝の規面と黙される箇所で段差が生じている。段部の縁から南方にかけては、検出硬化面よりやや高い位置に地形の傾斜に添って地山（第V層）が確認できている。

何れにしても、来年度実施予定の第2次調査で、舗装道路直下と土手部の全面を剥ぎ取ることにより、今回不明な点の多かった問題点の解明につながることを期待したい。今なおペールに隠れた謎の部分が多い、「東山道」信濃ルートと各地に配置された「駅家」の所在を解明する願が、ようやく動き始めたばかりであり、町内外を問わず今後に新たな事例の報告と、研究の成果を待ちたい。尚、今回の調査を通じ、各種報道の影響もあってか、町内外はおろか県内外から多くの人々の関心と注目を集めることになった。問い合わせの数や現地での見学者数も、例年になく多かったことで、様々な論議を呼んだことよりも、埋蔵文化財への一層の関心と保護への理解を深めてもらえる、いいきっかけとなったと言える。これが、今回の調査の最大のでき事であり、成果であったに違いない。

なお末筆にあたり、本事業に多大なご理解とご協力をいたいた中部電力株式会社飯田支店を始めとする関係諸機関、多大なご助言とご教授をいたいた各研究者の方々、並びに地元松島区の地域住民の皆様、そして直接調査にご尽力をいたいた調査関係者皆様に、本書の刊行をもって改めてお礼を申し上げたい。

#### 参考・引用文献（著者名50音順）

- |                 |      |  |
|-----------------|------|--|
| 一志 茂樹           | 1958 | 「古代碓水板考」信濃 10-10   |
| 一志 茂樹           | 1993 | 「古代東山道の研究」信濃書籍出版センター   |
| 大場 翔雄           | 1970 | 「古代東山道の考古学的考察」國學院大学紀要1                                       |
| 山林 鶴 他          | 1983 | 「入山跡」  |
| 木下 良・坂詰 秀一      | 1994 | 「対談・古代の道を語る」季刊考古第46号 雄山閣                                     |
| 木下 良            | 1994 | 「古代道路の地表遺構」季刊考古第46号 雄山閣                                      |
| 黒坂 周平           | 1992 | 「東山道の実証的研究」吉川弘文館   |
| 笛沢 浩            | 1975 | 「長野県下出土の須恵器」信濃 26-9・11                                       |
| 上伊那郡誌刊行会        | 1965 | 長野県 上伊那郡誌 第二巻 歴史篇 .....                                      |
| (財)長野県埋蔵文化財センター | 1990 | 中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4 一松本市内その1 - 総論編                        |
| 柴 登巳夫           | 1983 | 「東山道 深沢の駅についての一考察」伊那路第27巻3号                                  |
| 柴 登巳夫           | 1995 | 「大道上遺跡発掘調査 推定東山道の検出-現地説明会より-」信濃考古 NO 143<br>長野県考古学会.....(注1) |
| 長野県教育委員会        | 1974 | 48「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」箕輪町                                 |
| 長野県教育委員会        | 1973 | 48「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」辰野町その2                              |
| 長野県教育委員会        | 1990 | 「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4」総論編                                  |
| 長野県考古学会         | 1987 | 「信濃における奈良時代を中心とした縦年と土器縦相」長野県考古学会誌 55.56                      |
| 長野県史刊行会         | 1981 | 長野県史 考古資料編 全1巻(1) 遺跡地名表                                      |
| 長野県史刊行会         | 1985 | 長野県史 考古資料編 全1巻(2) 中・南信版                                      |
| 長野県史刊行会         | 1988 | 長野県史 考古資料編 全1巻(3) 遺構・遺物                                      |
| 橋崎 彰一           | 1969 | 「壺の道(1)-信濃における灰釉陶器の分布」名古屋大学文学部二十周年記念論集                       |
| 橋崎 彰一           | 1973 | 陶磁大系 第5巻 「三彩 緑釉 灰釉」 平凡社                                      |
| 橋崎 彰一・斎藤 孝正     | 1982 | 「豪投窯縄年の再検討」 愛知県陶磁資料館研究紀要2                                    |

柏崎 彰一	1983	「猿投窓の編年について」 愛知県古窓跡分布調査報告III
箕輪町誌編纂刊行委員会	1976	箕輪町誌 第1巻 自然・現代編
箕輪町誌編纂刊行委員会	1986	箕輪町誌 第2巻 歴史編
箕輪町教育委員会	1974	『八乙女五輪遺跡』
箕輪町教育委員会	1989	『堂地・中道遺跡』
箕輪町教育委員会	1990	『丸山遺跡』
箕輪町教育委員会	1996	『堂地・中道遺跡－第2次－』
箕輪町教育委員会	1996	『松島大原遺跡』

図 版



調査地近景(調査前、西方より)



4号溝状道橋(鳥瞰)

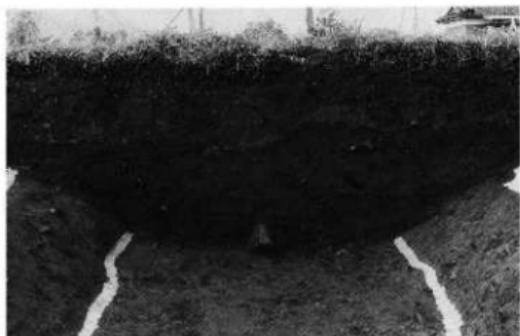


4号溝状遺構

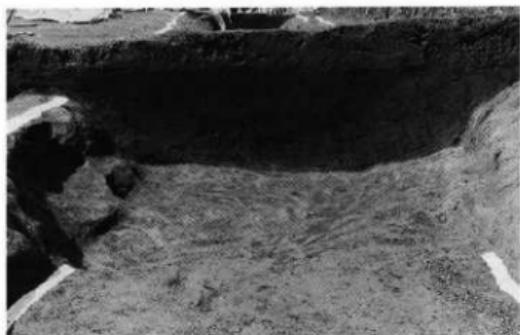


1号溝状遺構

4号溝状遺構土層斷面1 (A-A')



4号溝状遺構土層斷面2 (B-B')



灰釉長頸壺出土狀況

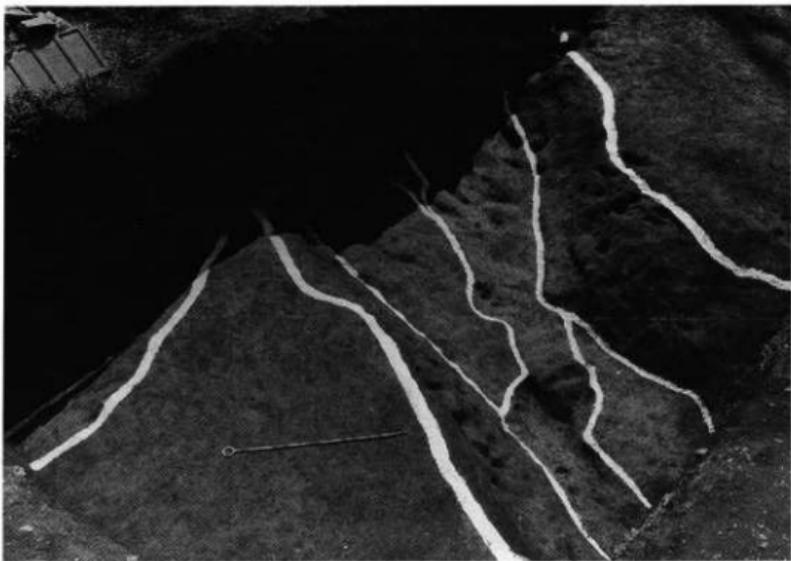




2・3号溝状遺構（鳥瞰）



2・3号溝状遺構



4・5・6号溝状造壊



7・8号溝状造壊(鳥観)



7号溝状遺構



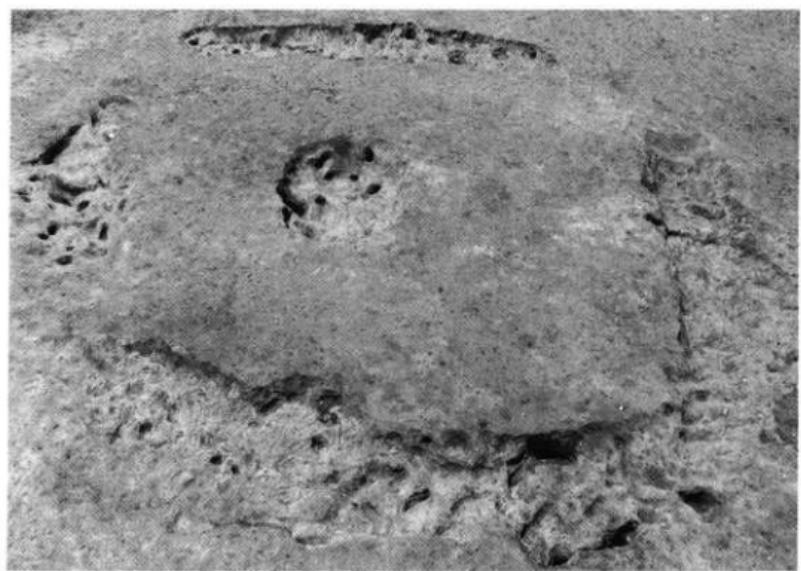
7号溝状遺構西土層断面 1



7号溝状遺構西土層断面 2



1号住居址

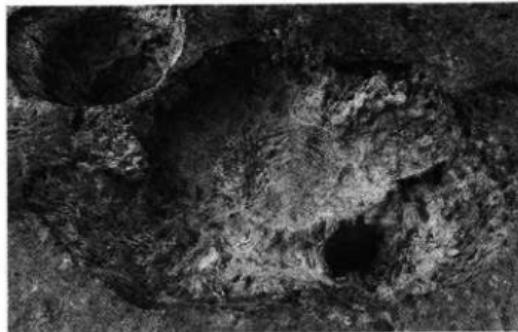


方形周溝状遺構

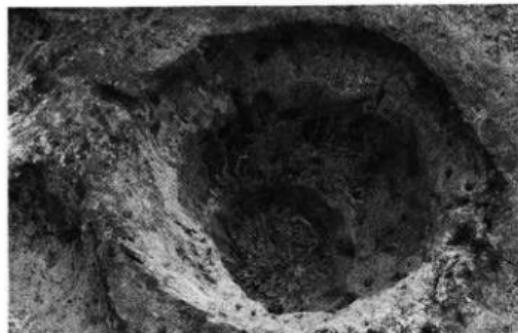
圖

版

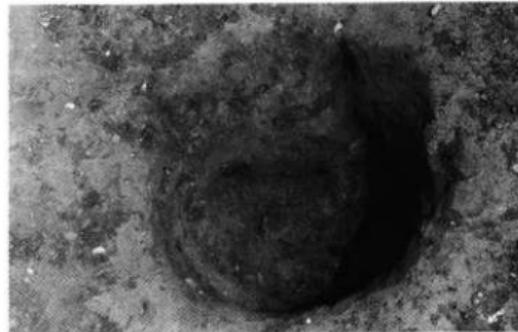
8



1號土坑

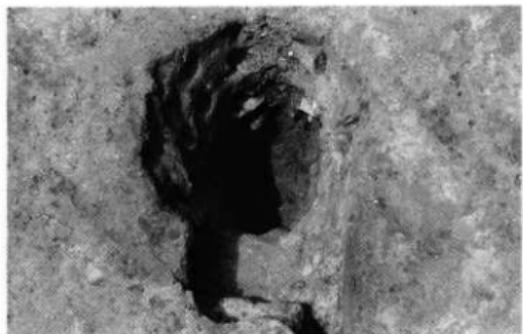


2號土坑

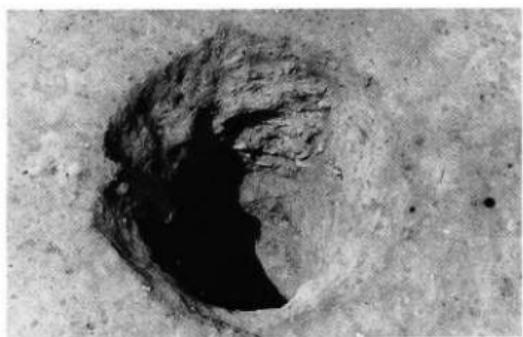


5號土坑

6 号 土坑

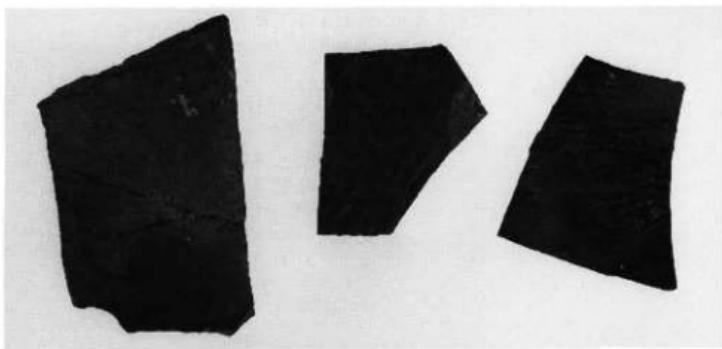
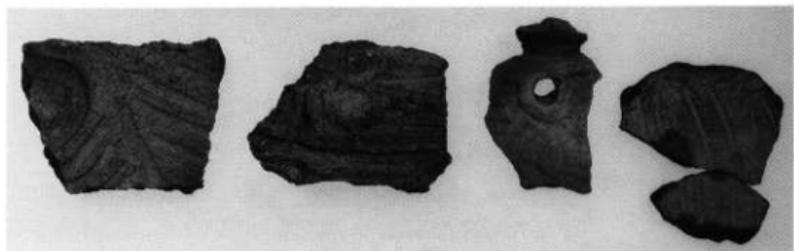
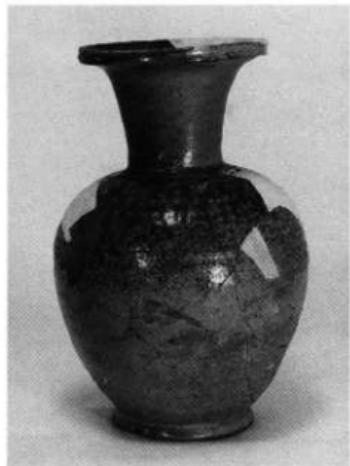


7 号 土坑

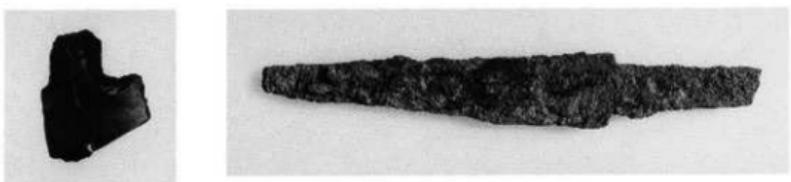
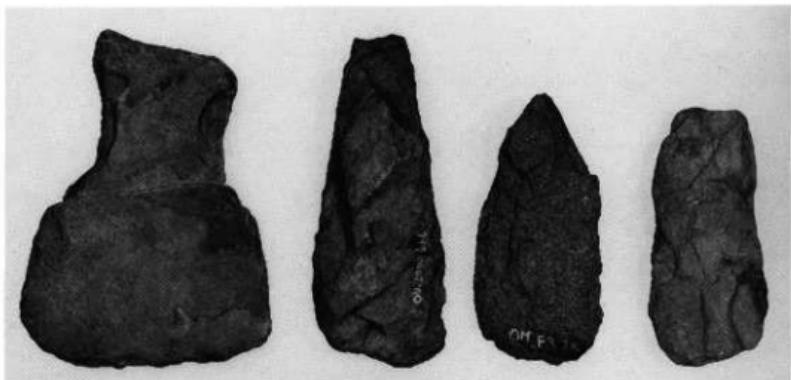


8 号 土坑





3·4號溝狀遺構出土土器、1號住居址出土土器、遺構外出土土器



出土石器、造橋外出土鐵器



調査参加者

報告書抄録

ふりがな	おおみちうえいせき						
書名	大道上遺跡						
副書名	平成7年度中部電力松島変電所拡張工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
著者名	赤松 茂・根橋とし子						
編集機関	箕輪町教育委員会						
所在地	長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪10,298番地 TEL 0265-79-3111						
発行年月日	1996年3月20日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
大道上	長野県上伊那郡 箕輪町大字中箕輪 11,045番地1他	50 2129	35度 55分 10秒	137度 58分 40秒	19941205～ 19941219 19950401～ 19950719	12,195 m <sup>2</sup>	中部電力松島変電所 拡張工事
所有遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
大道上	集落址 溝	绳文中期 绳文後期 奈良～平安 近・現代	竪穴式住居址 溝状遺構 土坑 方形周溝状遺構	1棟 8条 18基 1基	绳文土器 土器 須恵器 灰胎陶器 陶器 打製石斧 石匙 刀子	昭和46年に県教育委員会(中央道建設)、同62年に町教育委員会(県道沢尻箕輪線建設)が近接する堂地遺跡の緊急発掘調査を実施している。地形の並びから、上記遺跡と本遺跡は、同遺跡群に属すると考えられる。また、本遺跡地周辺が、「東山道」通過の推定地の一つとする意見もある。	

## 大道上遺跡

平成 7 年度中部電力松島変電所拡張工事  
に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

平成 8 年 3 月 20 日 印刷

平成 8 年 3 月 20 日 発行

発行所 長野県上伊那郡箕輪町教育委員会

印刷所 日本ハイコム株式会社

長野県塩尻市北小野 4724